

FUJIKO

鳳の眼

舞の章 水都篇

・前置き、主な登場人物

・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は`警備部暗躍係、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人、リカは女性だけで構成された大手劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られていた。彼女は死と隣り合わせの日々を送り、葛藤しつつ、あらゆる危機や難事件に立ち向かうという使命を与えられたのであった。

・主な登場人物

リカ

本作の主人公、大手歌劇団の人気スターを務めて、裏では密偵として犯罪に立ち向かっている。舞台の世界で人気を博してきた彼女は、歌劇団創立百周年記念の年に退団することを決意した。最後の舞台に取り掛かる彼女であったが、その裏で史上最悪の事件が起ころうとしており、巻き込まれることとなる。

アスカ

リカの跡を継ぐ次期歌劇団トップスター。現代的な恵まれた体型を武器に舞台を彩る素質が見受けられる。裏稼業ではあらゆる犯罪者を相手に日々立ち向かっている。戦闘スタイルは二丁拳銃で、銃技はリカから教わったようである。

ヒロコ

大手歌劇団に所属しており、リカとは同期で表と裏の世界を共に過ごしてきた戦友である。普段は落ち着いた性格だが、時に感情的になることがある。

ミナコ

元歌劇団男役スター。退団後、結婚して子を授かり、第二の人生を送っているが、ある事件がきっかけで、同期のリカと再会することとなる。

ユカ

元歌劇団男役スター。数年で歌劇団を去り、ミナコと同じく第二の人生を送っている。彼女は、結婚後、表稼業と両立させて、裏稼業も行っている。今回、同期のリカと久々に組み、難事件を担当することとなる。

カナメ

伝説の歌劇団トップスターの一人。偶然にもリカの芸名と同じため、親近感を持ち、彼女の活躍を陰から見守っている。表の世界では女優として活動し、裏稼業からは手を引いたが裏社会の情報はよく耳に入り、情報屋として活動している。

ジュンコ

歌劇団黄金時代を支えたスターの一人。絶大な人気を誇り、歌劇団を去った。彼女は、リカが所属している班の元祖トップスターである。退団後、結婚し夫の転勤で、数年間海外で生活することとなった。海外ではテロ撲滅のための慈善活動を積極的に行っていた。帰国後、芸能活動を再開し、密偵活動も行っている。

リエ

元歌劇団トップスターの一人。当時、歌劇団の次世代を担う舞台人として注目されていた。退団後は舞台以外に映画、テレビ等、活動の場を広げる。結婚後も裏稼業を継続している。

マユ

首席で歌劇団に入団した、エリートスター。順調にキャリアを積んでトップスターの座に就き、退団後も舞台の仕事続ける。裏の世界では凄腕スナイパーとして恐れられている。

エリ

元歌劇団実力派トップスターの一人。実力派がありながら下積み時代が長く、念願叶い、トップの椅子を手にする。トップからの活動期間は短く、百周年の年に退団した。その後は歌劇団のイベントに参加しつつ、新たな自分を探そうとしている。裏稼業は継続し、同期のマユと共にリカ救出に向かう。

ヨーコ

元歌劇団トップスターの一人。独特な色気を出して人気を博す舞台人。リカにトップの席を譲り、退団後も舞台に立っている。裏の世界では一匹狼として活動するが、リカの危機を知って駆け付ける。

ミチコ

歌劇団を代表する現役実力派トップスターの一人。長年の努力が認められ、トップスター就任が決まり、波に乗っている。裏では、国内のみならず海外の犯罪事件をチェックしており、ある事件に目がいき、仲間を集めて捜査を始める。

安藤ユウ

秘密警察の捜査員の一人で、リカのパートナーでもある。彼は、主に情報提供や連絡係で、現場捜査はリカに任せている。長年コンビを組んできたが、突然の海外遠征が決まり、彼はリカの前から姿を消すこととなる。

新沼光博

警視庁公安部の部長を務める。階級は警視監、秘密警察の最高責任者である。

本澤直人

警視庁公安部の課長、階級は警視。今回、上司の新沼に頼まれ、リカにある難事件の指令を出す。

朝居恒彦

大学卒業後、大手製薬会社の研究員として勤務していたが、ある事故がきっかけで退職した。その後、職に就かず引きこもり生活を送っていたが、密かにある計画を企てていた。

城ノ内結城

元海上自衛隊自衛官でコミュニティーサイトを通じて、朝居と知り合うこととなった。あるトラウマで人生がねじ曲がり、朝居と組んで良からぬことを企んでいた。

序章 解散×野望臭

一九九〇年代前半、バブル経済が過ぎ去ろうとした時である、その年、衝撃的なことが次々に起こった。

一つ目は天災。関西を中心に大地震が発生し、兵庫県の都市部の被害は甚大で、戦後に起きた地震の中でも最大クラスに匹敵する規模であった。ここの災害による死者の数は六千人以上、被害者にとっては、忘れたくても忘れられないこととなり、大きな傷跡を残した。それから数ヶ月後、今度は人災が起こった。発生場所は東京。

都内の地下鉄車内に化学兵器のガスが散布され、乗客や駅員ら十三人が死亡、負傷者数は約六千三百人とされる。日本において、大都市で一般市民に対して化学兵器が使用された史上初のテロ事件で、世界中の治安関係者を震撼させた。

平和な日本でこうも悲劇的なことが連続して起こるのは珍しかった、その年から異常気象で人命を奪う自然災害が数多く起こり、世間は不景気が続き、社会バランスを崩し、残虐な殺人に手を染める罪人が徐々に増えていった。それから時は流れ、様々な問題を抱えつつ、二十年が過ぎようとしていた。

時は二〇一四年、この年も災いをもたらす年となった。異常気象による土砂災害で多くの尊い命が奪われ、永い眠りから目覚めた火山による噴火で容赦なく人命を奪った。そして、天災ばかりではなく、ある陰謀が渦巻き、ここで二十年前に起きた人災が再現されようとしていた。

二〇一四年 十一月 某日

その日、彼女にとって大事な日であった。十数年、大手歌劇団に所属していたリカの最後の公演が幕を開こうとしていた。

若干曇り空で肌寒さを感じるが、天候には恵まれた方で無事公演初日を迎えた。

ショーは、大階段を覆い尽くすほどの大きなマントを羽織ったフェニックスが登場する場面から始まる。その美しさとスケールの大きさに一瞬で観客は引き込まれ、リカ含め、劇団員たちの華やかな舞台が展開される。

リカの幅広い七変化で楽しませる場面、劇団仲間に見守られて羽ばたいていく場面等、見どころは全てと言っていいほどでとにかく盛りだくさん。これ以上ない豪華なステージが用意され、クールかつ情熱が溢れ出るリカの魅力が引き出されている。

無事に退団公演初日を終えたりカは、特に変化はなく、いつも通りでひょうひょうとしていた。彼女は、まだ退団することに実感がなく、明るくファンに振る舞っていた。リカは、ファンの出待ちに颯爽と現れて、いつも通り簡単に意気込みを述べて迎えの車に乗り込んで去って行った。こうしてリカは近くて遠いゴールへと突き進もうとしていた。そして、公演初日から何日か経とうとしていた。

場所は神戸市 某町

公共住宅のとある一室。扉の前には大量の新聞がポストに入りきらず、溢れ出ており何日もほったらかしであることが窺えた。昼間ではあるがカーテンで光が遮られているため、室内は薄暗かった。あたりを見渡すとどっさりのごみで埋め尽くされ、足の踏み場がなく、俗にいうごみ屋敷の状態になっていた。やたら静かなので室内は無人かと思われたが、奥の個室に一つの気配があった。部屋中はさらにひどく散らかっていて、息苦しく居心地が悪い空間に仕上がっていたが、その人物は全く気にせずパソコンの画面と睨みながら黙々と何かの作業をしていた。

「♪」

「！」

その時、謎の住人の携帯が鳴りだし、慌てて確認を取った。メールだろうか画面を確認した時、謎の住人の表情が緩んだように見えた。普段表情に出さないその住人は、無邪気な子供のような表情を浮かばせて何やら良からぬ策を企てていた。その策が実行される時はそう遠くなかった。

場所は変わって兵庫県、リカが所属する大劇場付近の某町、その日、大劇場は休演日で、大劇場近くの行きつけの喫茶店でリカはある人物と会う約束をしていた。その相手は、裏の世界の相棒である安藤刑事であった。リカは特等席に座り、いつも通りコーヒーを注文して安藤に用件を訊ねた。

「...今度はどういった仕事？」

「.....いいや、今回は仕事の用で呼び出したんじゃないんだ...」

「...え？」

何故か、安藤の顔には覇気がなく、リカは彼のことを気にかけてた。

「...お前、今やってる公演を最後に歌劇団から去るんだろ...？」

「ええ、何よ今さら...」

「.....急のことなんだが、仕事の都合で海外に出張することになった...」

「...本当に急ね...すぐ戻って来るんでしょう？」

その時、安藤は頷こうとせず、間を取って重い口を開こうとした。

「...さて、はっきりしたことは分からない...一度戻ってきてもまた出張...しばらく国内に居ることが少なくなるかもしれない...」

「...え？一体どういう仕事なの？」

「...それは言えない、いくらお前でも...極秘中の極秘の任務だ...」

「そうなの...何か大変そうね...」

「...ああ、現在の世界は予想以上に荒れているぞ...至る場所でテロや紛争が起きている、もう日本も無視できない...本国が標的にされるのは時間の問題だ...じきお前たちも関わることになる」

「...私たちも？」

「ああ、以前に公安の課長から説明されたと思うが、歌劇団を卒業した者は結婚しない限り密偵活動を辞めることが出来ない...お前は承知の上で退団を決意したんだろ...？」

「ええ、まあ...」

「...退団後、裏稼業を続けるわけだが、お前はフリーとなる上、活動範囲が一気に広まる...」

「...それも聞いたわ」

「.....活動範囲は国内だけでなく、世界中ということになり、任務内容も過酷さを増す、在団中は俺たち組織がサポートしていたが、フリーになれば命に危険が生じる場合でも一切関与しない、組織は命令を下すだけ...有力な情報は自分で手に入れなければいけない...そんな生活耐えられるか？」

「.....」

リカは安藤の問いに答えず、沈黙のまま視線を逸らそうとした。

「.....まあいいだろう、...お前が決めたことだから、もう余計な口出しはしない.....」

「...!!」

安藤はリカの答えを待たず、優しい口調で本題に入ろうとした。

「.....急だがコンビ解消だ、今後何か仕事の依頼が入れば別の担当者、もしくは上層部から報告が入る...これからそっちに従ってくれ...」

「...!」

リカは驚きを隠せず、自然と口を開いて動揺していた。

「.....付き合いは十年ほどだが世話になった...色々あったが楽しかったよ、ありがとう、またどこかで会えば軽く挨拶くらいしてくれ...」

「.....」

「...あとフリーになった場合のメリットを教えてやろう、フリーになった場合、ギャラが大幅に増える、金に困ることはないだろう...あと何か困ったことがあればフリーになった先輩を訪ねろ...力になってくれるはず、以上だ...」

安藤はリカに喋っていくが、彼女は無反応で人形のようにちょこんと座った状態であった。彼は一方的に喋り、徐に立ち上がって会計用紙を手を取った。

「.....旅立つ前にお前の晴れ舞台を観に行く...最後の舞台を楽しみにしている、観劇する日は言わないから気にしないでくれ、それじゃあ達者でな...」

安藤はリカに別れの挨拶を告げて、二人分の会計を済ませて店を後にした。

「.....ありがとう」

リカは安藤に別れを告げず、座ったまま小声で簡単に感謝の言葉を呟いた。その時の彼女は澄ました顔であったが、よく見ると目に光るものがあった。リカは安藤が去ったことで、心にぽっかりと穴が開いているようであった。しかし、そんな時、最も危険な任務が彼女に迫ろうとしていた。

リカの退団公演が上演されてから中盤あたりの時期、多くのファンのチケット争奪戦は激しさを増していた。

ようやくトップスターとして板がついてきたので、突然の退団に賛否両論が起こっていた。親しい演出家や関係者からは、もう一年続けられないかと頼むほどであった。

現在の歌劇団の現役寿命は短く、実力があつたとしても二十年未満で退団することになる。退団した劇団員は、そのまま歌劇団で身につけたスキルを活かして仕事を続けるか、結婚して家庭に入るか選択される。

仕事を続ける者は、歌劇団時代の時の雰囲気を持して、ファンの夢を壊さぬよう努めている。また、裏方としてダンスや演技指導に回ることもある。最近では、結婚した者もたまにテレビに出演したり、トークショーを開いたりと積極的に活動している。

さらにこれは異例のことであるが、歌劇団の世界から離れ、転職をしている者もいる。販売員、歯科医、大学教授など職種は様々。退団した者は老後のように第二の人生が待っているのであった。

リカは、退団発表の会見で「私は歌劇団のことしか知らないのこれから色々なことに挑戦してみたい」と積極的に答えた。結婚の予定はなく、今後の彼女の活躍が注目されていた。

退団公演の抱負を記者が訊ねると、リカは「いつも通りにやるだけです」と澄まし顔で淡々と答えた。普通意欲がないコメントと感じ取られるが、それは完璧に役を演じ切る自分の最後の姿を見てほしいということの意味するわけである。澄ました顔の奥に情熱の炎が今まで以上にメラメラと燃えているようであった。

リカは、普段マイペースで穏やかであるが、仕事のことになるとストイックになる。

舞台に立つリカの演技力には恐ろしいほど魂が宿っており、実在した人物の場合、上手く憑依している。これで彼女がどれだけ芝居の仕事を好んでいるかが分かった。

また、裏稼業で密偵として活動してリカであるが、彼女は幾度と危険な任務で死線を彷徨っていた。表の仕事が忙しい中、彼女は数々の犯罪を解決してきた。

しかし、それは公の場で公開されていない。あくまで影として命令に忠実に従い、時に任務遂行のため、冷徹に振る舞うこともあった。

歌劇団退団後、裏稼業は続けることになり、フリーとなる。任務が過酷さを増すことになるが、それは覚悟の上であった。しかし、突然、彼女にとって衝撃の出来事が降りかかった。長年、裏稼業でコンビを組んでいた安藤が、リカの前から姿を消した。コンビ解消はリカが退団してからであったが、安藤の都合で少し早い別れとなった。別に仲がいいわけではないが、目を閉じて気を抜くと、リカの頭の中に安藤の姿がよぎった。リカの最後の公演を観劇したそうだが、安藤はリカに何も言わず、海外へと旅立った。

こうしてリカと安藤の最強コンビは完全に消滅した。

第一話 惨劇のビジョン

リカは絶賛されている退団公演終演後、夜遅く一人稽古場に残り、自主稽古をしていた。彼女は特に新しい自分を見せようとせず、今までの経験を活かして、成長を見せることに躍起であった。若手時代から使用していたこの稽古場とも別れの時が近づいていた。

「...！」

その時、一人の劇団員がリカの居る稽古場に入っていた。

「...どうも、失礼して大丈夫ですか？」

「...うん、いいよ、休憩中だし...」

稽古場に入室してきたのはリカの後輩であった。

名はアスカ。歌劇団に所属している舞台女優の一人で入団当初から注目される。現代風の整った容姿で、はっきりとした顔立ちが特徴である。順調に力をつけていき、スターの階段へと駆け上がって行った。そんな彼女もリカ退団後、トップスターを引き継ぐこととなり、新体制チームの先頭に立つこととなる。彼女はダンスが得意で、演技力に磨きがかかってきたのはリカの影響だとされる。裏稼業でも、リカから色々と学んで術を身につけた。

「...こんな時間まで自主稽古ですか？精が出ますね」

「凝り性だからね...今日はすぐに帰るんじゃないの？」

「ええ、でも予定が変更になったので戻って来ちゃいました...ご一緒していいですか？台詞合わせもしたいので...」

「うん、いいよ...何時間でも付き合うよ」

「.....でもその前に少し話しませんか？最近お互いバタバタして、ゆっくりと話せなかったんで...」

「...うん、そうだね、まあ座りなよ...」

アスカは、鏡の壁にもたれているリカの横に座り込んだ。

「...本当に久しぶりだね、こうやって話すの...仕事や稽古でよく顔を合わせるけど、ゆっくり話す時間ないもんね～」

リカたちは笑いながらここ数ヶ月に起きたことを話そうとした。

「...それで全国ツアーの方はどうだったの？」

「...最初は緊張しましたがけど、いい経験になりました...リカさんに教わったことを全国ツアーで試そうと思っていましたから...」

「地方の舞台は大劇場と違うでしょう？また違う解放感を味わって正解だよ～」

「...何か原点に戻った感じですね～初舞台を思い出しました...」

「...私もね、懐かしくなって何とも言えない空気に包まれたよ...その経験は本境地での公演で活かされるよ...」

「...そうですね、アドバイスありがとうございます、リカさんのお蔭で、苦手な演技も自信がつかえました...！」

「私は別に何も教えてないよ...言葉で伝えることが苦手だからね...でもついつい後輩の稽古を見ていると気になっちゃうんだよね...人間観察が趣味なもんで...」

「...リカさんの洞察力には驚かされます、人の苦手に行っていることをすぐに見つけられることが優れている...」

「別にたいしたことないけど、変に世話焼きなところがあるからね～アスカもそうだけど、若手の子にはいい舞台人になってほしいから...」

「リカさんは優しいですね、包容力がある男役にぴったりです、私もリカさんを見習って皆に尊敬されるスターにならないと...」

「...何言ってるの？アスカは既に皆から慕われているよ～慕われている人って自分で気づかない

ものよ...あと私の真似をする必要はないわ、卒業していった先輩、皆同じこと言ってると思うけど、自分のスタイルを貫いた方がいいと思う、私って変人だし...」

「リカさんはギャップがあるからいいですよ、一見クールそうでふにゃ～としている時があるじゃないですか、急に体育会系になったり、スイッチの切り替えが激しいですよ～」

「私もよく体が持つな～と思う、私は私だから、アスカの好きにしなよ...！」

「...分かりました！」

「.....それにしても今回の公演、上手く私たちの関係とリンクしているよね...？」

「...そうですね、私とリカさんが出ている場面はまさに継承の場面だと思います...」

「演出を担当している先生とは付き合いが長くてね...信頼できる人だからかなり助けられたわ...今の私たちに相応しい作品よ...」

「その通りですね...」

リカたちは熱く舞台について語っていき、一呼吸した後、別の話題に触れようとしていた。

「.....リカさんには裏の仕事でも大変お世話になりました...あなたがいなかったらもうこの世にいないかもしれません...」

「...大袈裟だよ、私がいなくてもアスカは裏の世界でも十分にやっつけていけるよ...」

「...いえいえ、リカさんのお蔭で射撃のスキルが上がりましたし...戦術も色々と勉強させてもらいました...」

「...まあ、とにかく心配いらないよ、もうちゃんと表と裏で生きていける、私が保証する！後のことは頼んだよ～」

「ありがとうございます、自信ができました！」

「.....さてと、話は尽きないけど、この辺にして、そろそろ台詞合わせしようか？」

リカはどうか気持ちを落ち着かせ、質問から逃れようとしていた。

「...そうですね、すみません、よろしくお願いします！」

アスカは訊いてはいけないことだと察し、リカの言葉に従った。

「もうこれで最後だから厳しく行くよ～覚悟はいい？」

「はい！」

リカはアスカに対し、優しくゆるく語りかけるが目を見ると鋭く真剣そのものであった。こうしてリカとアスカは夜が更ける中、熱心に稽古に取り掛かった。

同じ頃、兵庫県の公共住宅密集地。古びた公共団地の一室。ごみ屋敷と化した部屋で、一人の住人が灯りを消したままパソコンの画面に向かっていた。小刻みにキーボードを叩く音が響いていて、謎の住人は、SNSのコミュニティーサイトを利用しており、知り合いと連絡を取り合っていた。

謎の住人のハンドルネームは、`気まぐれ博士、連絡相手のハンドルネームは、`孤独の女王`

気まぐれ博士「こっちの準備は整った、そっちは問題ないか？」

孤独の女王「ええ、問題なし、いつでも動けるわ」

気まぐれ博士「一つ実験がしたい、協力してもらえるか？」

孤独の女王「ええ、勿論よ、どうすれば？」

気まぐれ博士「二日後の午前六時、指定された場所に来てほしい、渡したいものがある、実験内容も詳しく話す」

孤独の女王「...かなりハードな仕事？」

気まぐれ博士「...いや、君なら簡単にできることだ、ギャラもちゃんと払う、指定の口座に振り込もう」

孤独の女王「随分景気がいいのね、ずっと家に籠ってどうやって収入を？」

気まぐれ博士「詳しくは教えられないが、臨時収入が入った、いいバイトを見つけてね、そっちでかなり儲かっている」

孤独の女王「多分堅気の仕事じゃないわね、まあいいわ、お金のために動くつもりはないけど、有難く頂くわ」

気まぐれ博士「では明日よろしく頼む…」

「♪」

その時、二人の会話に割り込む新たな訪問者が現れた。ハンドルネームは`無邪気な兵隊、

無邪気な兵隊「死死死死死死、どうもこんばんは～何やら楽しそうな話をしているようですな～俺にも味あわせてくれ、じゅるるる、おっと涎が…」

`無邪気な兵隊、は、狂気に満ちた文章で挨拶をした。

気まぐれ博士「無邪気な兵隊君は鼻が利くな、何か用か？」

無邪気な兵隊「俺にも何か仕事させてくれ、派手に暴れたくてうずうずしている！」

気まぐれ博士「君の出番はまだまだ先だ、今回の件は関係ない」

無邪気な兵隊「まあそう言うなよ、同盟を組んだ仲じゃないか、どんな汚れ作業もするぜ」

気まぐれ博士「…勘違いするな、僕は君のほんの一部の技量に興味を持っただけだ、それ以外は全く興味がない、君くらいの人材はいくらでも集められる、切ろうと思えばいつでも切れる…勝手な発言は避けた方が賢明だと思うが…」

無邪気な兵隊「……………」

孤独の女王「おつむの軽い坊やは大人しく家で待ってなさい」

無邪気な兵隊「何だこのアマ！！！」

孤独の女王「はっきり言ってあなたのことは嫌いだわ、顔を合わせなくても分かる、送られた文

章に下品なイメージを漂わせているから」

無邪気な兵隊「てめえ言わせておけば！」

気まぐれ博士「.....もう止めろ、みっともない、こう言うては何だが、無邪気な兵士君はどうしても粗っぽさが目立つ、今回の件は君には無理だ、孤独の女王は繊細だから任せることにした、まだ文句があるというのなら聞こう」

無邪気な兵隊「...ちっ分かったよ、ボスのあんたには逆らえない...声が掛かるのを待とう」

気まぐれ博士「よし、納得してくれたか、そう慌てることはない、楽しみはとっておいてやる、まだ始まったばかりだからな」

無邪気な兵隊「そうか、楽しみにしてるぞ」

孤独の女王「話はまとまったみたいだからそろそろ失礼するわ、眠気が襲ってきたわ」

気まぐれ博士「そうだな、こんな時間にすまなかった、それでは当日の方、よろしく頼む...」

孤独の女王「任せておいて、お休みなさい」

無邪気な兵隊「...いい知らせを待ってるぜ、お休み...死死死死死死」

謎のコミュニティーサイト利用者たち三人は、きな臭い密談を交して通信を切った。そのうちの一人、ごみ屋敷の主である`気まぐれ博士、と偽名を名乗る住人は、そっと席を立て、すぐ近くの木製の机の方に移った。

机上には大量に物が置かれていて、長い間片づけていないのが明らかであった。置かれているのは何か設計図のようなものが書かれた大判ロール紙や化学の科学の実験で使用する用具などが乱雑に置かれていた。`気まぐれ博士、は机上の物を乱暴に払いのけて、一つのアタッシュケースを載せるスペースを作った。

「...カチャ」

謎のアタッシュケースの中を見ると、精密な機械が入っていた。`気まぐれ博士、は、ちゃんと機械が作動するか、念入りに確認していた。確認後、`気まぐれ博士、は安心したのか、表情が緩んだようであった。この謎のアタッシュケースと闇に潜む住人の野望により、史上最悪の惨事が起こる日は近かった。

それから二日後、兵庫県神戸市、某地下繁華街、店はほとんど開いておらず、駅につながる通路は、ラッシュの時間ではないため、人通りがまばらであった。そんな静けさが漂う場所にトレンチコートを身に纏った紳士的な人物が現れた。手にはアタッシュケースを持っていた。その人物は、通路内に設置されている公衆の男子トイレに颯爽と入って行った。そこから彼は個室に入り、用を足そうとしていた。

数分後、個室から紳士が姿を現した。

「...ドン」

紳士は、トイレを利用する男性とぶつかったが、何も言わず去って行った。

「...何や、あいつ？感じ悪いな～...！」

男性は、ぶつかった紳士に愚痴をこぼし、あることに気づいた。

「...これは？」

男性が個室である物を見つけた。それは紳士が持っていたアタッシュケースであった。男性は紳士の物だと察知して渡そうとケースを持ってトイレを出た。しかし、紳士の姿は既になかった。男性は仕方なく駅の方に届けようとした。

「...ピ」

「え？」

その時、かすかに電子音が聴こえ、ケースが勝手に開いた。開いた途端に中からガスが発生した。

「.....な.....何やこれは？...げほ...ごほ.....！」

男性は瞬く間にガスに包まれて咳込んでいた。そして、すぐ意識を失ってその場で倒れ込んだ。さらには近くにいた民間人もぼたぼたと倒れていき、地下街は一瞬で危険区域と変化していった。さわやかな朝は幻となり、地獄と化した。しかし、これはまだ序章にすぎなかった。

東京 警視庁 公安部部長室

ある朝、広々とした一室に一人、専用デスクに腰掛ける者が居た。名は新沼光博 五十六歳、

警視庁公安部の部長を務める。階級は警視監、秘密警察の指揮官でもある。

新沼は持病を抑える薬を飲んだ後、デスク上の専用パソコンを操作していた。彼は、画面に集中して釘付けになっていた。どうやらパソコンでニュース番組を観ているようで、画面を見る表情は真剣そのものであった。

「...♪」

その時、部長室に内戦の呼び出しが入り、新沼は我に返り、デスクのスピーカーフォンで電話に出た。

「...兵庫県警本部長、寺川様から外線一番にお電話です」

「うむ、分かった...出よう」

新沼は、パソコンのテレビ電話機能から外線番号を選択して電話対応しようとした。

「...お電話かわりました、新沼です」

「...新沼さん、お久しぶりです、急なお電話申し訳ありません、お時間よろしいですか？」

「...はい、遠慮なく用件を言って下さい...」

「...よかった、.....実は厄介なことを抱えていまして...ご相談したいことが...ニュース番組はご覧になっていますか？」

「...ええ、今も丁度観ていました...そちらでは随分騒ぎになっているようですね...」

「...はい、とんだ大惨事です、こんなことは初めてですから...」

寺川は今朝、神戸市の地下街内で起きた忌まわしき事件のことで、新沼に電話してきたのであった。

「こちらもずっと気になっていました.....テロですか？出来れば、状況説明をお願いできますか...？」

「はい、現時点で分かったことをお教えします.....読み上げてくれ」

「はい」

パソコン画面を見ると、寺川の背後に一人の男性が現れて立っていた。彼は寺川の忠実な部下であった。その部下は礼儀よく新沼に挨拶した後、事件の状況について報告しようとした。

「.....現場は神戸市の〇〇地下街、駅構内...突如、謎の有害なガスが発生したことが原因で、通行人がバタバタと倒れていったようです、また、そこから半径五十メートル離れた場所に居た通行人は、頭痛や吐き気があるということで、病院に緊急搬送されました...負傷者数は、現在のところ五十四名...そのうち二十九名が意識不明の重体です...！」

「...それは、つまり無差別のテロ事件だということだな...？」

新沼は、画面に映っている報告者に問いかけた。

「はい、毒物が混入された空気感染によるバイオテロ事件だと考えられます...！」

「.....二十年程前に東京で起こったテロ事件と似ているな...関連性は？」

「...ええ、それはすぐに調べましたが...今のところ不明です、当時の事件の主犯であるカルト教団については捜査中です...」

「ガスが発生したのは早朝だということだな...？」

「はい...ラッシュ時間よりずれて発生しました...もし、ラッシュ時間に発生した場合、被害は二倍、三倍に膨れ上がっていた恐れがあります...」

「...成程...見せしめのためにわざとずらしたかもしれない...これは、警告として受け止めた方がいいな...」

「...また連続して起こる可能性が高いということですね...」

新沼と寺川は、意見が一致していた。

「...さきほど調査隊から報告があり、現場にあるものが発見されました...」

「あるもの？」

すると、報告者は、新沼に一枚の写真を見せようとした。

「事件が起きた地下街内で、このアタッシュケースが発見されました...」

「アタッシュケース...？」

「ケースを開けると、ポンプ付きの装置とポリ容器が内蔵されていました...ポンプやポリ容器内から化学薬品の成分が検出されたため、これが毒ガスになったと考えられます...」

「...防犯カメラなどで、不審人物が映っている映像はないのか？」

「生憎、現場付近には、防犯カメラが設置されていなくて映像はありません...」

「...手掛かりなしか.....」

新沼の表情が曇ろうとするが、報告者の表情にはまだ余裕があり、何か有力な情報を持っているようであった。

「...犯人が映った映像はありませんが、犯人につながる手掛かりは、まだあります...！」

「...それは本当か？」

「ガスを発生させたケースのすぐ近くに、被害者男性が一人倒れていたのですが、ケースにその男性の指紋がついていました...！」

「...どういうことだ？その男性がケースを...まさか犯人！？」

「.....その可能性は低いでしょう、男性は、まだ病院で生死の境を彷徨っている、自殺行為になってしまうわけだから主犯とは考えにくいかと...」

「...成程、しかし、調べる必要があるでしょう...どういうきっかけで指紋がついたか...」

寺川の冷静な意見に新沼は納得して、捜査方法について述べた。

「...今のところ事件のカギを握っているのは、その男性だけですね、彼が目覚めるのを待つしかない...」

「...報告は他にあるか？」

「...いえ、今のところこれだけです」

「ご苦労、下がっていいぞ」

報告者は、寺川たちに一礼して持ち場へと戻った。また二人きりとなり、まず、新沼の口が開いた。

「.....それで私はどうすればよろしいですか？」

「...そちらの部署の優秀な職員を何人か派遣して頂きたいのですが...」

「お安い御用です、すぐに送りましょう」

「ありがとうございます、助かります、今バタバタしていて人材不足でして...近年、そちらの協力のお蔭で、多くの犯罪組織を撲滅出来て、検挙率が上がりました、暴力団もだいぶ大人しくなりました...」

「...そうですか、それはよかった、本庁では評判が悪い方なんですけど、地方からはよく誉められるんですよ」

気分をよくした新沼は、冗談を言い放ち軽く笑顔を見せた。

「...先日も紛争ダイヤ密輸の件で大変お世話になりました...」

「...ああ、確か事件に絡んでいたのは若手実業家でしたな...父親は大物資産家の白谷文明...」

「ええ、息子の逮捕で白谷グループの評判はガタ落ち、株価も下落の一途を辿っている...父上もショックでついに入院しました...」

「...実に残念ですな、ちょっとネジが緩めば、瞬く間に総崩れになる恐れがある...」

「...今回の件も油断出来ません、被害を今以上に大きくしたくありません、どうか力を貸して下さい...」

「...勿論です、お任せください、準備ができたならご報告します...」

「はい、ではこちらからも事件の詳細についての情報をメールで送ります、進展があれば随時お知らせします」

「...分かりました、どんな些細な情報も大事ですからな...」

「ええ...ではひとまずこれで失礼いたします...それでは...」

電話を終えた新沼は、一呼吸した後、内線ボタンを押して部下一人を呼び出した。

「...本澤部長はいるか？」

「本澤部長は.....公務で外出中です、遠方のため帰りは夜になるようです...」

「.....そうか、では帰って来たら私の部屋に来るよう言ってもらえるか？」

「...はい、そうお伝えします」

新沼はパソコン業務で目が疲れてきたため、一旦席を立ち上がって気分転換しようとした。彼は、窓から外の景色を眺めて何か考え事をしていた。

「.....安心して年を越せるだろうか...」

新沼はふと独り言を言って、不安を感じていた。

第二話 厄災の狼煙

兵庫県 歌劇団大劇場

その夜、リカは同期の劇団員と共に夜風を浴びようと大劇場の屋上へと向かっていた。冬を迎えようとしていたが、気温は例年より高い方で、寒波が訪れる前のため、まだ穏やかな風が流れていた。

「.....ブアックシュン~！！！！」

リカは、屋上で大胆にくしゃみをしていた。

「...どしたの？風邪？」

同期の劇団員が心配して、リカに声を掛けた。

彼女の名はヒロコ。リカと同期で、共に歌劇団の一時代を築いた舞台人である。長身で普段おっとりしたタイプであるが、いざ舞台に立つと別人に変わり、悪役からコミカルな役まであらゆる役柄を使い分けて、プロの演技力を発揮している。その実力は、芝居を得意とするリカも一目置いているほどである。彼女も今上演中の作品で退団することが決まり、リカと共に歌劇団から去ることとなる。

裏稼業でもリカとコンビを組みることがあり、息がぴったりで危険な任務を乗り越えて行った。

「...違うよ~こんな時に風邪なんて引いてられないよ~」

「稽古場との温度差が激しいね、もうサウナ状態だから耐えられない、外の空気を吸わないと。まじ死んじゃう！」

「...そうだね、振り付けの先生も汗びっしょりだった...下級生の子は怒られながらも頑張っていたけど...」

「...私たちも若手の頃、演出家の先生に怒られていたよね、今となっては、ためになってるけど...」

リカたちは、自販機で買ったコーヒーを啜りながら若手時代の思い出を語った。

「上演期間もあと半分.....もうあの稽古場ともおさらばなんだね~」

「...退団するなんて実感ないよ、周りの皆もいつも通りだし...リカは実感ある？」

「...私もないよ、何も感じない、やっぱり千秋楽にならないと分かんないな〜」

「...そろそろ引越しの準備しないとね、そう考えるともう退団するんだな〜と思うけど...」

「...だね〜私は退団後、実家に戻るよ、しばらく会っていないから...」

「私も地元に戻るよ、この先のプラン何も考えてないけど...」

「...私もそうだよ、やりたいことはいっぱいあるけど...私はのんびり屋だからゆっくり考えることにするよ...それに暇じゃないから...」

「.....裏の仕事は継続だからね、別にいいんだけど、この前、マミコから聞いたよ、一緒に仕事したんでしょ?...変装でドレスまで着てくれたって...本当に感謝しているって言ってたよ...」

「...その話はしないでよ、もう思い出したくないんだから...」

「...何だよ〜？舞台でしょっちゅう着てるじゃんよ〜」

「.....それとはまた別だよ〜プライベートではスカート一切穿かないんだから...仕事とはいえ恥ずかしいよ...」

「...まあいい経験になったじゃん、仕事上変装することが多いんだから...」

「...まあそうだけど、そういえば最近裏の仕事入ってこないね〜」

「...そういえばそうだ.....私たちに気を遣っているとは思えないけど...」

「...これは何かあるね、また厄介な事件を押し付けようとしているんじゃないの？」

「.....ああ、そうだ！今朝のニュースでやってたけど、神戸の地下街で毒ガスみたいなもの撒かれたみたいだね...」

「ああ、知ってる、ネットでも話題になってるし...犯人はまだ捕まってないんでしょう？」

「...毒ガスの影響で、被害者も増えてきているようだし、これで終わったとは思えない...どう思う？」

「私も連鎖して起こると思う...手口はプロの犯行みたいだし、人通りが激しくない時間帯に事件が発生してるから、恐らく実験的に行ったのね...次はさらに被害が拡大することは間違いない...！」

リカは、自分なりに推理した。その時の表情は、役を演じている時と同じで実にシリアスであった。

「.....まあ捜査に参加していない私たちが何を言っても無駄だね...」

「...何も連絡入ってないでしょ？」

「...うん、全然」

「...今回は関わらなくていいんじゃない？とにかく私たちは舞台に集中しよう」

「...そだね、そろそろ体も冷めてきたし、戦場に戻りますか？皆待ってるし...」

リカたちは休憩を終えて稽古場へと戻った。呑気な二人ではあるが、もう史上最悪な事件に巻き込まれていることを知らなかった。

同じ頃、警視庁公安部部長室、夜が更けていき、職員の数はいくつか少なく静かであった。

「...コツコツコツ」

そんな中、廊下から足音が聴こえ、速歩で公安部部長室へと向かう者がいた。

その人物の名は本澤直人 五十一歳、公安部の課長、階級は警視。リカたちに指令を出す頼れる上司である。趣味は演劇鑑賞、テニスなど。

「...コンコン」

その時、扉をノックする音がして、気づいた新沼はすぐに通した。

「.....失礼します、遅くなって申し訳ありません...」

「...待ちぼうけされたかと思ったぞ、コーヒーをどれだけ飲んだか.....まあ、座りたまえ...こっちも急に呼び出してすまなかった...」

「.....用件は大体把握しています...例の神戸の事件のことですね？」

「ああ、君を待っている間に進展があった...見てくれるか...」

新沼は、印刷された兵庫県警から送られたメールを本澤に見せた。

「私にも連絡が入りました...神戸では嚴重に検問が張られています、今のところ有力な情報は入っていないようです、犯人の情報は入ったんですか？」

「...犯人の姿を目撃した人物を一人発見して、名は堀部康之 三十八歳、飲食店経営、彼を事情聴取した...」

新沼は、犯人を目撃した人物の写真を本澤に差し出して、話を進めようとしていた。

「そうですか、それでその人物は何と？」

「.....駅近くの公衆トイレで偶然遭遇し、体がぶつかったが、何も言わず去って行ったそう...そして、犯人らしき人物が入っていた個室の中でアタッシュケースを発見し、彼は、犯人らしき人物の持ち物だと思って、渡そうとトイレを出た...しかし、彼は犯人の姿を見失った...その直後だ、惨劇が起こったのは...彼は第一の被害者だ...！」

「.....彼は今、病院に？」

本澤が質問すると、新沼は眉間に皺を寄せて、険しい表情を見せた。

「.....さっき病院から連絡があった...息を引き取ったと...」

「...そうですか」

本澤は目を閉じて、無言のまま被害者の死を悼んだ。

「.....現在のところ、彼を含め、九人の善良な市民の命があっけなく消えた.....まだ生死を彷徨っている人はたくさんいる...自分の無力さに腹が立つ...我々警察に出来ることは、一刻も早く犯

人を挙げることだ」

「...はい、被害者の証言を無駄にするわけにはいきません、犯人の特徴は？」

すると、新沼はまた新たな資料を本澤に差し出した。

「.....犯人の特徴として、服装はグレーのトレンチコートを着て、紳士帽子を被ったビジネスマン風の人物...用心のためか、サングラスをかけて、マスクをして顔を隠している...これが唯一、防犯カメラに映っている姿だ...現場付近は、カメラの数が少ないようだから貴重なものだ...」

「...そうですか...それで被害の発端となったガスの正体は分かったんですか？」

「...ケースの中身についてはまだ解析中だが、以前に東京の地下で使用された神経ガスの成分ではなかったようだ...ただ即効性がある有害なものであると...」

「...県警から要請があったんですか？」

「...ああ、かなり頼りにされているようだ、先発メンバーは決定し、明日、神戸に派遣される...本格的なチームは様子を見てから考える...そこで君には今回の任務に適した主力となる人材を選んでほしい...」

「...分かりました、手の空いている者から厳選して選びます...」

「...よし、まだ先になるが、地元の警察と協力して捜査に移る！あとマスコミに余計な情報を漏らさないよう注意しろ...」

「心得ています...」

「.....機転が利く君のことだ、派遣するメンバーはもう決まってるじゃないのか？」

「...ええ、一応」

「期待しているぞ...」

本澤の頭の中である部下の姿がよぎり、その部下を派遣候補にしようとしていた。

「.....ブアックッシュン！！！！！！」

リカは、稽古場で派手にくしゃみをぶちまけていた。

「.....あんた本当に風邪じゃないの？」

ヒロコは、休憩中の時と同じようにリカを気にかけてた。

「.....おかしいな～誰か噂してんのかな～？...」

その時、リカは何も知らず最後の舞台のことに没頭していた。

ある高層マンションの一室。室内は暗闇に包まれて、住人はもう眠っていると思われたが、一室だけうっすら光が見えていた。その一室には一人の住人が居て、黙々とパソコン作業をしていた。

その住人の部屋はきちんと整頓され、清潔感が溢れていた。また、お洒落な家具や可愛らしい小物が置かれていて、女性の部屋のようにであった。住人は、あるコミュニティーサイトを利用していた。

気まぐれ博士「.....とりあえずは成功だな...探られてないだろうな？」

孤独の女王「私はプロよ、問題ないわ...役に立ったつもりだけど...」

気まぐれ博士「...そうだな、感謝する...しかし本番はこれからだ...中途半端な覚悟では先に進めない...本当にいいんだな？」

孤独の女王「ええ...目的のためなら何にでもなるわ...悪魔に魂を売ったわけだから」

気まぐれ博士「...分かった、ではまたこちらから連絡する...それじゃあまた...」

一人黙々とパソコン操作している人物のハンドルネームは、`孤独の女王`。会話相手のハンドルネーム `気まぐれ博士` は、ごみ屋敷と化した部屋に住む怪しげな人物であった。

孤独の女王の部屋には、グレーのトレンチコートがハンガーに掛けられ、ソファに紳士帽子が置かれているのを目にする。間違いなく、彼女が毒ガスを仕掛けた犯人であった。気まぐれ博

士は共犯者とされる。

さらに驚く点があり、彼女の部屋には銃器が無造作に置かれていた。

孤独の女王はパソコンの電源を切り、部屋を出てバスルームへと向かった。どうやら寝る前にシャワーを浴びるようであった。

服を脱ぎ捨てた彼女の体は、細身ではあるが、引き締まっており筋肉質であった。彼女は明らかに常人離れした異様な空気を漂わせていた。

こうして火蓋は切られて、役者は揃い出していった。リカが彼らと接触する日はそう遠くなかった。

その日、急遽執り行われた衆議院議員総選挙の投票日であった。大寒波が日本列島を覆い、多数の投票数は望めなかった。結果は自民党、公明党の圧勝、そんな中、大物政治家の落選、戦後最悪の投票率の低さを記録して、ひとまずピリオドを打った。

同じ頃、兵庫県を本拠地にする大劇場では、リカのサヨナラショーが披露されていた。そして、ついに翌日は千秋楽、リカの顔を拝もうと、入り待ちから大勢のファンが大劇場に押し寄せた。千秋楽日は、通常通り、芝居とショーの二本立て。さらにリカのサヨナラショーに最後は退団者の舞台挨拶という構成になっている。リカは、ファンサービスを欠かさなかった。歌劇団随一の美貌とプロポーションを誇り、最後まで自分の舞台人としての美学を貫いた。

リカと一緒に退団する仲間と共に集まったファンに感謝の意を述べ、鳴り止まない拍手と歓声に包まれながら大劇場から去って行った。その夜、リカに対するファンからの熱気は冷めず、終始劇場周辺は賑やかであった。しかし、その翌朝、一変して衝撃的なことが飛び込んできた。

翌朝の各局のニュース番組、内容は臨時ニュースのようで、担当アナウンサーは、早口で事件の原稿を読み上げているため、視聴者には十分なほど緊迫感が伝わっていた。事件が起きた場所は、兵庫県神戸市のものであった。

「...JR三宮駅構内で無差別のテロ事件が発生したようです...! 詳しい被害状況はまだ分かりませんが、これは九〇年代に起こった東京地下鉄バイオテロ事件を彷彿とさせる衝撃的な事件です...何台ものパトカーや救急車が出動し、現場は何とも言えない緊張感に包まれ、地獄絵図のようです...詳しい情報が入る次第お伝えします...それでは次はスポーツニュース.....」

その朝、昨日とは違い、天候は荒れ模様で冷たい雨が降っていた。リカは偶然にも目を覚ましており、彼女の耳には、例の臨時ニュースのことが繰り返し聴こえていた。しばらくの間、彼女の体は固まってしまい、思うように動かなくなってしまうていた。

「♪～」

「...!!」

その時、リカに訴えかけるかのように電話の着信が入った。それは警視庁からであった。彼女は我に返り、落ち着いて電話に出た。

「...もしもし？」

「...お早う、緊急回線で掛けている...今大丈夫か？」

「はい...！大丈夫です」

電話を掛けてきたのは、公安部の本澤課長であった。

「まず一つ訊くが...ニュースを観れる状態か...？」

「...はい、今丁度観ていました...」

「...よかった...どこも同じニュースだと思うが、テロ事件が起こった...！神戸で...」

「ええ、ずっと観ています.....ネットでもそのことで騒ぎになっているので...！」

「ああ...急なことで申し訳ないが、緊急を要する...聞いてもらえるか？」

「勿論です！」

次第にリカの顔つきは鋭くなり、戸惑わず本澤に従った。

「...すまん、早速だがお前にこのテロを捜査してほしい...！」

「.....私が！」

「そう驚くな.....神戸で起きたテロ事件のことは、もう大体把握してるだろう？」

「...ええまあ」

「ネットニュースなど当てにするなよ.....現在のところ、事件発生時刻は...午前八時ごろ...駅構内でガスが撒かれ大きな被害が出た...現在のところ、負傷者数は二五三七名.....死傷者数は十三名...命が危ない重傷者は六十名以上...ラッシュ時を狙った犯行だと思われる...最悪な

事態だ...！！」

「.....その撒かれたガスとは...？」

「.....ガスの成分が入ったアタッシュケースが発見されたんだが...分析すると神経ガスの一種で.....以前に都内の地下鉄駅構内で使用された神経ガスとは違うものだった...だがかなり強力な有害物のようで、そのガスは駅全体を覆った...」

「...犯行声明は？」

「.....声明はない...ただ先日、今回のテロを予兆す事件が起きていた...被害は今回のと比べると小さいものだったが...また同じような事件が発生すると予測した我々は、すぐさま捜査に乗り出したが未然に防ぐことは出来なかった.....被害は予想をはるかに上回っている.....」

「...やはり先日の事件がつながっていたんですね.....犯人の目星は？」

「...残念ながらこれといった情報は入っていない...現地で派遣調査員が調査中だが、二十年前に起きた東京バイオテロの主犯格であるカルト教団とは無関係のようだ...だから洗いなおしている.....また事件が起こる可能性があるからな...」

「成程.....」

「...そこでだ、このバイオテロ事件の捜査をお前に一任する.....」

「！.....私に任せて大丈夫なんですか？」

「...お前が経験不足の新人なら頼まんよ...腕を見込んで選んだ...やってくれるな？」

「...はい」

「自信を持って...お前に全て背負わせるわけじゃない...すでに現地には優秀なスタッフを派遣してある...情報集めに上手く利用しろ...そして、何としても犯人を確保するんだ！」

「...分かりました」

リカは、ようやく決意を固めた。

「よし、それでは早速行ってもらおうか...現場に...最寄駅から三宮に向かってくれ、今から指示書を送信するからそれに従うように...あと任務が遂行されるまでこちらに連絡をするな...こちらからも一切しない...」

「了解しました...それでは行ってまいります！」

「...うむ、いい結果を待っている...」

リカは、本澤の言ったことに従い、電話を切った。同時に本澤は受話器を置いた。

「...本当に彼女に任せてよかったのか？」

「.....ええ、問題はありません、私の目に狂いはありませんよ...」

本澤の部屋には公安部の新沼部長が訪れており、黙って椅子に座りながら本澤たちの電話内容を聞いていた。

「.....よほど彼女を気に入っているようだな...」

新沼は、リカの経歴リストを見ながら本澤に話し掛けた。

「...ええ、彼女は思った以上に優秀ですよ...繊細かつ大胆な一面を見せて、まだ不思議な力を秘めています.....」

「...そうか、表の仕事は、もう引退するんだったな...」

「...はい、しかし、裏の仕事はまだ続けてもらいます...その後、任務の過酷さが増すわけですから...」

「...成程、次のステップに進んだための試験というわけだな...？」

「ええ、今回の件で手こずるようなら先に進む資格はないかと...」

本澤はリカの実力を信じて、事件の解決を願った。こうして、リカが捜査に参加したことによって、さらに事態は激化するのであった。

ここは、神戸の中華街で百あまりの店舗が軒を連ねる。店頭の路上で点心、スイーツ、食材、記念品などを売る店も多く、休日は地元の買い物客や観光客で賑わう。

リカは、本部から送られた指示書に従い、中華街を訪れた。

「.....うわ、小籠包美味しそう〜♪」

リカは中華料理の匂いに誘われ、周囲の寄り道しそうになったが、涎を拭いてどうにか目的地に辿り着いた。そこは古びた老舗の中華料理店であった。

「いらっしやい！」

そこは威勢のいい店員の声が飛び交う店内で、満席状態であった。

「カウンター席でよかったら一席空いてますよ〜！」

愛想のいい店員が、大きな中華鍋を扱いながら鳳堂に声を掛けた。

「...ありがとう、すみません...」

リカは、恐る恐る空いているカウンター席に腰を下ろして、適当に注文を取った。リカは、周囲を見渡して落ち着かない様子であった。

「.....公安の使い...だな？」

「...！？」

急にリカにぼそっと声を掛けてきたのは、となりに座っている地味な痩せ型の中年男性であった。

「...視線は合わさなくていい...このまま話す...すぐ済むから...」

「...了解」

リカは静かに頷き、男の話を聴こうとしていた。

「.....例のテロについての情報を提供する.....新ネタも含まれている...」

「.....ありがとう、恩に着るわ...」

男は、リカにそっと長形四号（90×205）の黒い封筒を渡して、彼女はそれをすぐさま胸の内ポケットにしまい込んだ。

「...これで用は済んだ...私とはもう会うことはない...あとは他の協力者の指示に従ってくれ...」

情報を提供した男は、注文したラーメンのスープを飲み干して、何事もなかったかのように代金を払って店を去って行った。

リカは軽く食事をとり、次は昔ながらの落ち着いた雰囲気のお茶店へと入店した。空いている席に適当に座り、ホットコーヒーを注文した。注文したものが来るまで、彼女は情報提供者からもらった黒い封筒の中身を確認しようとした。確認すると、数枚写真が入っていた。それは初めに地下で起きたテロ事件と駅構内テロ事件で監視カメラが捉えた怪しい人物の写真であった。

「.....顔は変装してはつきり分からないけど、背格好が似てるわね...同一人物かも...」

写真の他には書類が入っており、それには事件現場以外の目撃情報が記されていた。犯人らしき人物は、この近辺をうろついているようであった。その他は事件に関連した記事が記録されたUSBが入っていた。リカはひとどおり目を通し、また胸の内ポケットにしまい込んだ。

「.....さて、出るか...」

リカはコーヒーを飲み終わり、会計を済まそうとしていた。

「コーヒー美味しかったです～ご馳走様～」

「ありがとうございます...こちら割引券ですので、次のご来店の際、ご利用ください...」

「...これはどうも.....!？」

リカは、女性店員から割引券を渡された時、強い目線を感じた。

「ありがとうございました...」

リカは店を出た後、手にした割引券に何かないか目を通した。すると裏面に手書きで何か書かれていた。それは次に向かう場世の住所であった。あの女性店員もまた情報提供者であった。リカは、次の目的地に向かうため南京町を後にした。

第三話 麗人の失態

三宮 高架下商店街

神戸の歴史ある商店街の一つで家電、家庭用品、衣類、食料品、飲食店の他になかなか手に入らない珍品などの販売店がある。シャッターが閉められた店が多くなってきたが、活気は衰えず、常連客や観光客などで賑わっていた。リカは書かれた住所の店を訪ねようとした。

「...ここか」

リカが訪ねた店は古びたリサイクルショップであった。店内に入ると、昔懐かしい家電や流行った商品が並んでいた。

「あの...すみません！」

狭い通路の奥を進んでいくとレジがあり、誰も居ないため、リカは大声で呼び掛けた。

「.....はいはい、すみません、お待たせしました.....」

すると、一人の年配の女性が姿を現した。

「.....すみません、ある商品を探してるんですが...」

「...ほう、それは何かな？」

「.....軽量のアタッシュケースを.....」

「.....！！」

その時、リカの発言に対して、店員の表情が若干強張った。店員は、リカを入店させたままで店のシャッターを急いで閉めた。

「狭い店なもんで入りきれなくてね.....奥にあるんよ...一緒に来てくれない？」

「...はい」

リカは店員に案内され、地下につながる階段を下りて行った。一室に連れられ、灯りがつい

た後、二人はじっと目を合わせた。

「裏稼業は引退したと聞いてたけど.....こんなところでバイト？」

リカは、店員に変な質問を投げ掛けた。

「.....バイトじゃないわよ、臨時要員として頼まれたのよ...」

その時、店員の声色が変わり、聴くと若い女性の声であった。

「...私しかいないんだから素顔で話したら？その顔だと話しづらいわ...」

変装している店員は、要望通り、顔に手を当ててゆっくりと変装マスクを外そうとした。

「.....ふう、私ってこういうの慣れてないのよね...デスクワークが多くて...」

「そうかな～？別に不自然さはなかったけど.....」

店員に化けていたのは、リカの仲間で、名はミナコ。リカとは歌劇団時代の同期で、順調にキャリアを積んでいき、実力ある男役として人気を博したが、数年で退団した。

退団後、結婚してそれを機に危険な裏稼業からも手を引くこととなった。表の世界では子育てをしながらあらゆる資格をとり、ヨガインストラクターや美食品アドバイザー、講師などの仕事を精力的にしている。今回はピンチヒッターで、プログラマーとしてテロ捜査チームに派遣された。

「...全く人使いが荒い組織だわ～急に連絡が入ったわ、例のテロ事件で手を貸してほしいと...それでこのむさ苦しい場所に派遣されたわけ...」

「...成程、あなたは頭脳とコンピュータで事件を解決するのが専門だったからね...久々に一緒に仕事が出来て嬉しいわ...あなたがここの責任者？」

「...私はサポート役よ、責任者はあっちよ」

「...！」

そこには、一人のスーツ姿の女性が居て、オペレーターたちに指示していた。

「あっ久しぶりね、リカ」

スーツ姿の女性もまた、リカの友人で歌劇団時代の同期であった。

名はユカ。ミナコと同じく早期退団して、現在は舞台やイベントを中心に活躍している。リカの大劇場サヨナラ公演の司会も務めた。また、裏稼業では継続して密偵活動を行っている。

「...あなたも派遣されたの、まるで同窓会ね...ヒロコも呼んだら喜ぶわよ...」

「...そうね、もっとちゃんとした場所で会いたかったけど...」

「あなたがこの基地の責任者？」

「...ええ、そうよ」

室内はハイテク機器に埋め尽くされ、モニターには、神戸の街の様子が映し出されていた。

「.....標的の目撃情報が多い場所を中心に監視カメラの映像をチェックしてるの...一度尾行したけど、見事に逃げられたけどね...」

ミナコは自分の席に座り、機器を操作しながらリカに説明した。

「そう...他に手がかりは？」

「...事件で使用された化学兵器のことについて調べるとある情報を入手したよ.....犯人らしき人物が一人拳がった.....」

ユカは、ミナコに被疑者の情報を出すよう指示した。ミナコは、パソコンモニターにスキャンした映像をリカに見せた。それはある新聞記事であった。

「...これは？」

「...五年前の記事よ...あまり大きく載ってないけど、ここ...薬品会社の研究室で事故が起きたと載っている...幸い小さな事故で済んだけど、実はそれは危険な実験で、上層部は大反対したそうよ...それでも一人の研究員は、無視して研究を実行した...それで会社側は事故のことを隠ぺいしようと、研究を実行した研究員を解雇したのよ...」

ユカは、腕を組みながらリカに記事の内容を説明した。

「五年前のこの事故と今回のテロとどういった関係が...？」

「...まあ聞いて...事故の真相を突き止めるため、会社の関係者と接触することに成功したの...」

「そうなんだ...それで何か収穫が...？」

「...あったわ、実は研究者の中に事故の被害者が居るのよ...事故発生後、体の調子が悪くなり、検査すると体内から微量の化学薬品の成分が検出された.....今でも後遺症が残っているため、通院を繰り返しているそうよ...」

「それってまさか...！！」

リカは、直感で事故の真相を読み取った。

「...そう、今回のテロで使用されたガスの成分と同じもの...その被害者は実験体だった...神経ガスの解毒剤を作る実験だったらしいけど、失敗に終わったのよ...」

「...その危険な実験を実行した研究者のは誰なの...？」

「...勿論調べてある...」

ミナコは、研究者の履歴をまとめた資料をリカに見せようとした。

朝居恒彦 三十八歳 ※解雇時の年齢。都内の大学院薬学部を優秀な成績で卒業し、大手の製薬会社に入社。開発部の研究員として配属される。新人時代からあらゆる新薬品の開発に成功し、功績が認められ順調に出世コースに進み、同時に会社も急成長の波に乗り、有望な研究者として期待される。

「.....こんな人物が化学兵器を.....？」

「...確かにその履歴を見れば信じられないわ...でも裏を返せば、その研究者は優秀な頭脳を持

っているけど、人間性...性格に難があった...いわゆるマッドサイエンティスト...優秀すぎるのがネックになり、エスカレートして危険な実験を続けたのよ」

ユカは、近くの椅子に腰掛けて、話を被疑者について述べた。

「...また痛い天才科学者か.....」

「...え？」

リカは、ふと以前に神戸の研究所で起きた事件を思い出し、ついミナコたちの前で声を出してしまった。（※鳳凰変幻 鴉の眼編参照）

「...ごめん、独り言よ、気にせず続けて！」

「.....彼は危険性を伴う実験を続けて、自ら開発した痛覚を麻痺させ、筋力を一時的に増強させる薬は、効き目が強すぎて実用化までに至らなかった...そして、彼は例の事故で解雇されて蒸発した...ところが...」

「...！」

ミナコは、リカに被疑者のことについて話して、ある映像に目を向けさせた。

「.....最近の映像よ.....例の駅構内テロ事件の慌ただしい現場を調べると、野次馬に紛れ込んで映っていた...雰囲気は違ったけど彼に間違いはないわ.....彼が生まれ育ったのは兵庫県...地元に戻ってひっそりと暮らしていたのよ...平然と繁華街をうろついている映像もあるわ...彼の住居については調査中...親と親族とは疎遠になっていて、手がかりは一切なし...」

「...彼一人で今回のテロを起こしたっていうの？」

「それは考えられないわ...例のトレンチコートを着た人物と同一人物とは考えにくい...恐らく他に仲間がいるわ...」

ミナコは、パソコンで照合して、被疑者とトレンチコートの人物が別人だということを証明した。

「...それで私はどうすれば...？」

「.....ここは即席の対策司令部よ...現在、市内には何人もの調査員が情報収集していて、全ての情報がここに入ってくる...あなたは、入手した情報をもとに標的を追跡して、捕まえてもらうわ...何より、次に起こるかもしれないテロを阻止してもらうためにも...」

「そう.....まだ私の出番はないよね...」

「近くのホテルにあなたの名前で一室予約してある...ここより居心地がいいから...」

ミナコは、リカに宿泊するホテルの場所を教えた。

「...とりあえずそのホテルで待機してもらって、何かあればすぐに連絡する.....私はそろそろ派遣調査員と合流するよ...」

ユカはコーヒーを一口飲んだ後、出掛ける準備をした。

「了解...風邪引かないようにね...」

「ありがとう...あなたちょっと痩せたんじゃない？」

ミナコは、ふと、リカの体型を気にした。

「そう？しばらく暴飲暴食を控えているからかな...？」

リカは、一旦仲間と別れて、店から去って行った。外を出るとやたらパトカーが多く、警官隊が街を巡回しており、テロの影響で緊迫感が伝わっていた。

予約した宿泊先は、高級ホテルで丁寧な対応で部屋まで案内された。窓の方を見ると、街の美しい夜景を一望でき、リカは満足げな表情を浮かべた。彼女はさっそくルームサービスを頼んで、ベッドでごろ寝した。

その日、結局緊急の連絡は入らず、夜が更けて、リカは仮眠を取っていた。やがて、朝を迎え、モーニングコールで目覚めたリカは、朝食バイキングを頂こうと、すぐさまレストランへと足を運んだ。彼女は行儀よく食材を皿に乗せて、朝食を楽しもうとした。それからしばらくすると、彼女の携帯端末に一通のメールが入り、すかさず確認した。ミナコから緊急メールが送られ、リカは、すぐに地下の対策司令部のあるリサイクルショップへと向かった。

ミナコは、店番をアルバイトに扮した同僚に任せて、リカと共に地下へと入って行った。

「……とりあえず今のところ新しい情報は入っていないわ…ユカや張込みをしている調査員から連絡が入るまで待機よ…今のうちなら落ち着いて備品を渡せるわね…」

「？」

すると、ミナコは机の上に置いてある金属製の箱を取り出して、ゆっくりと蓋を開けた。

「…現場に行く際、これを使って」

「…この銃は？」

「これはうちの組織で開発した特別の銃よ、名付けてグロック26カスタム、あなた専用の銃よ…小型だけど威力は大口徑のマグナム以上よ、あなたのような特殊な訓練を受けた人間だけしか使用出来なくて普通の人間が扱えば、腕ごと吹っ飛んでしまうわ、身体能力が向上しているあなたなら簡単に扱えるでしょう…ただ、今回は安全を考慮して、実弾と一緒にこの特殊麻酔弾を用意したわ…人を撃つ時は必ずこれを…！生け捕りにするのよ…」

「…分かったわ！」

リカの銃は、光を当てると黒から深い紫色に変化して、それは彼女の好みの色であった。

「…次にこれ、この小型携帯端末は仕事用よ、GPSが内蔵されていて、役に立つ情報が次々に送信されるわ…内蔵されたカメラは、どんな暗闇でも鮮明に撮影出来るようになってる…それと付属のコードレスイヤホンマイクを耳に装着すれば、無線機として使えるわ…この対策司令部と送受信出来るよう、周波数は合わせてある…」

「…何でもコンパクトね～便利な時代になったもんだ～」

リカは、お年寄りのような口調で感心していた。

「……あの…張込みB班から緊急連絡が！」

「…！！」

その時、何か進展があったようで、室内は一気に慌ただしくなった。そして、ついにリカとテロリストの戦いが始まろうとしていた。

地下の対策部で待機していたリカであったが、有力な情報が入り、朝から緊迫した空気に包まれていた。

「.....標的らしき人物を発見.....画像を送る...」

オペレーターは、ユカたち張込班から送られた画像を即座に分析した。

「...変装でごまかしてるけど、彼に...朝居に間違いはないわ...！」

「商店街を歩いて行き、中心街に...！」

「.....彼から目を離さないように... `狩人、を急行させた...！じき合流する...！」

リカはコードネームをつけられ、連絡が入ったのと同時に現場へ向かって、嵐のように疾走して行った。

「アタッシュケースを持っている.....！まさか、また構内で仕掛ける気？」

ミナコは、悪い予感が的中しないことを祈っていた。

「.....標的は駅の方角に...」

「...え！？街を出る気...？」

ミナコたちは、予想外の展開にさらに焦り出していた。

「.....現在、標的は阪急電鉄の運賃表を確認中.....」

標的は改札を抜けて、リカは、ユカたちと合流して駅に向かい、指示を受けた。

「...リカだけ追跡続行...張込班は待機よ...！」

「.....注意してよ、リカ...！」

「...了解！」

リカが単独で標的を追うことになり、彼女は急いで駅の階段を駆け上がった。標的は駅の売店

で新聞や飴を買い、電車に乗り込んだ。リカはどうにか間に合い、標的が乗車している車両より一両後ろにずらして乗車した。その時間はラッシュ時で満員となり、標的は座れたが、リカは立ったままであった。車内は人の体温で温度が上昇していき、暖房がいらぬほどであった。

こうして、災いと希望を乗せた電車は発車時刻を迎えた。

「.....特急、梅田行き...大阪に向かう気...？」

ミナコたちが不安を抱える中、電車は発車した。

「..... 〃狩人、現状を報告せよ」

地下対策部のオペレーターは、無線でリカの応答を待った。

「.....標的を尾行中.....前の車両に標的が座りながら新聞を読んでいる.....」

「.....例のアタッシュケースは？」

「.....荷物は...網棚に載せてるわ.....うう...」

「...どうしたの？」

「.....車内がぎゅうぎゅう詰めなのよ...身動きが取れない.....！」

「...ラッシュ時間だからね...たまには経験しておいた方がいいでしょう...見失わないように頼むわよ...！」

「...了解」

ひと駅停車するにつれて乗客が減って行き、ようやく車内の圧迫感がなくなり、リカは安心して標的を監視しようとした。しかしそれも束の間、動きがあり標的はすっと立ち上がった。

「...次の駅で降りる気？」

リカは、じっと獲物を狙うような目で標的を見ていた。案の定、標的は西宮北口という駅で降車していった。

そこは大きな駅であらゆる交通手段、歓楽街が集中しているので、乗り降りが非常に多かった

。標的はそのまま改札を出ると思いきや、駅構内をうろうろしており、下りのエスカレーターへと向かった。

「...！」

標的は別の線に乗り換えようとしていた。リカはすかさず標的を追った。彼女は無事に乗車して、電車は二人を乗せて発車した。

リカは、また同じように一両ずらしてそこから標的を監視した。窓の風景は閑静な住宅街であり、車内は女性や学生、年配の乗客が多く、落ち着いた時間が流れていた。

「...あっ！」

リカが車内に貼られた広告を見渡すと、ふと豪華な衣装を身に纏った歌劇団員の宣伝ポスターを目にした。それには自分も写っており、また、百一周年と記された宣伝ポスターも貼られていて、そこには歌劇団の将来を担う新入生が、可憐な衣装を着て写っていた。

「.....私も過去の遺物ってわけね...」

リカはしみじみと呟き、標的の監視を続けた。

標的は、腕を組んだ状態で座っており、特に怪しい様子はなかった。各駅停車のため、順に停車していき、標的はまだ降りようとせず、じっと座ったままであった。このまま何事もなく、走行することを願ったが、終点の一駅前の駅に近づいていた時、異変が起こった。

「カラン...」

その時、車内の床に、軟式テニスボールくらいの大きさの謎の球体が転がっていた。

「.....なにこれ...？」

乗客たちが謎の球体を目にしたその時...

「パン！！！」

車内で一瞬閃光が走り、大きな破裂音が鳴り響いた。

「キャー！！！！！！」

「！？」

瞬く間に車内はパニック状態となった。そこは標的がいた車内であった。破裂した謎の球体は、煙を発して一気に車内に充満した。これは明らかに、リカが監視していた標的の仕業であった。

さっきまでの静けさが嘘のように車内は地獄の空間と化した。リカが騒ぎに気づいた時は、既に標的の姿はなかった。

「...え？標的を逃がしたの！？」

「.....車内は煙が充満している.....ごほ...彼が仕掛けた玩具で、車内は大パニックよ！」

「...尾行がばれていた...！？その煙は？」

リカは車両を移り、すぐ車内の換気をするため、窓を開けて標的より人命を優先した。

「.....まだ意識がある人は、早く窓を開けて！！」

リカは、混乱している乗客に的確な指示を出しながら標的を探した。

「ドンドン...！！きゃあああああ.....」

すると、前方の車両から銃声と悲鳴が聴こえた。その時、車掌と運転士は騒ぎに気づき、車両は急ブレーキが掛けられた。急ブレーキにより、全車両の乗客は四方八方に倒れ込んだ。車両は、先頭から二両目までが、宝塚南口駅のホームに着いている状態であった。駅のホームにいる客も異変に気づいて野次馬を作ってざわついていた。

「ドン...ドン！」

覆面をした人物が車両の窓に発砲し、蹴破ってそこからホームへと出ようとした。覆面の正体は、リカたちが追っている標的であった。

「...！」

その時、リカは標的が車両から出たことに気づき、すぐさま破られた窓から外へと出て跡を追った。しかし、彼女の視界には標的の姿はなく、仕方なく駅近辺で標的のことについて聞きこ

みをした。

「...覆面をした人物なら橋がある方に走って行ったけど...」

「...橋？」

その橋とは、全国でも珍しいガーデンプリッジで噴水や彫刻、四季折々の花壇、ベンチなどがある。渡りきるとモダンな建造物が建ち並ぶ。また、近辺にリカが所属している歌劇団大劇場が建っている。

「...まさかこんなにすぐに戻ってくるとはね...」

リカは、目撃情報を頼りに橋を渡りきるが、そこから道が分かれており、どちらに行くか分からずじまいであった。

「...くそ、完全に見失った...一体どっちに?...!!」

その時、リカの体に異変が起こった。彼女は気分が悪くなり思わず膝をついた。

「.....あれ...?調子悪いな.....さっきの煙吸いすぎたかな...?まさか例の毒ガスとか...はは...死ぬのかな?.....」

リカは、突然目まいがして、意識が朦朧となり気を失いそうになった。

「.....あの.....大丈夫ですか!？」

「!？」

その時、リカに天の声が舞い降りた。優しい声の主の姿を拝むと、美しい顔立ちで、プロのモデルのように細くて、おとぎ話に出てくるお姫様のような出で立ちであった。リカには、それが女神のように見えた。

「.....しっかりして!立てますか?...あれ...?」

謎の美女は、リカの顔を確認して驚いている様子であった。

「...え？」

リカもまた、謎の美女の顔を見て、同じく驚いている様子であった。

「もしかしてリカちゃん...？」

「もしかしてカナメさん...？」

お互い顔を合わせて、知り合いかどうか確認した。リカに声を掛けたのは、歌劇団のOG、つまり先輩であった。

名はカナメ。当時では珍しいフェアリータイプの異色の男役として存在感を表していた。その愛らしい容姿から初見の者には娘役に間違えられることも多いが、本人は男役であり続けることにこだわりを持っており、平均より早くトップスターの座についた。歌劇団黄金時代を支えた舞台人の一人である。退団後も仕事を続け、女優、声優、歌手と幅広く活躍している。裏稼業は引退しているが、現在は密偵の若手育成に力を入れている。

リカの尊敬する舞台人の一人で百周年のイベントで奇跡の共演を果たした。

「...どうしてこんなところに？大丈夫？顔色悪いけど...」

「...だ...大丈夫です...カナメさんこそどうして...？」

「...ちょっと大丈夫ですか？」

すると、そこにまた何人かりカを心配する者が駆けつけた。

「.....あれ？リカ...何してんの？」

「...あれ？リエさん...！」

あとから駆けつけてきた人物もリカの先輩であった。

名はリエ。地道に経験を積んでいき、トップスターの地位に登り詰めた元歌劇団員。

歌劇団入団前は、硬式テニスでプロ選手を目指していたが、姉の歌劇団音楽学校受験を契機に歌劇団にはまり、当時、現役スターだったカナメのファンとなり、それがきっかけで進路変更を決めた。

リカとは数年共演しており、歌劇団での活動期間は短い方で、退団後に結婚し、女優やタレント業を続けている。途中、体調不良で倒れたが、無事復帰して裏稼業も継続して続けている。

「あら...お久しぶりね、どうしたの？公演は終わったんじゃない...？」

「...ジュンコさんまで...！」

駆けつけてきたもう一人も、リカの先輩であった。

名はジュンコ。新設された歌劇団の班の初代トップスターを務め上げた（リカはこの班の六代目トップスター）。退団公演では、チケット競争率・ファン動員数が当時の史上最高を記録した。退団を届け出るに当たり、彼女は「可能性を持ちながらも歌唱力を発揮するチャンスが限られがちな若手に勇気と自信を与える場を」と歌劇団に掛け合った。退団後には、外資系旅行会社の現地駐在員をしている男性と結婚。夫の海外赴任に同行して、しばらく海外移住することとなった。裏稼業は、継続して海外で起きているテロの撲滅に力を注ぎ、自ら慈善活動も行っていった。数年後、夫が東京に転勤したため帰国。以降は、歌手として活躍するかたわら、舞台にも出演している。

「本当に皆さん大丈夫ですから...」

リカは、先輩たちを心配させないように無理に立ち上がろうとした。

「ぎゅるるるるる～.....」

「...！！！！！！？」

その時、リカの腹部から音が鳴り響いた。体の不調の原因はこれであった。

「.....」

しばらく四人の間に変な空気が流れた。リカと歌劇団OGは、近くの喫茶店に来店していた。そこで、OGたちはコーヒーを注文して、リカは大盛りのナポリタンを注文していた。

「お腹空いてたんだね.....」

OGたちは、呆れてリカの顔を見ていた。

「...はは、すみません、ご心配おかけして...おまけにご馳走になっちゃって...何処で落とされたのかな？財布.....」

リカは、苦笑いをして頭が上がらない状態であった。

「気にしないで...今日はOG代表として、百周年イベントに出演するために大劇場にやって来たんだけど...早く来すぎちゃって.....それで時間潰そうと、皆で街中ぶらぶらしていたら、偶然あなたと出会ったわけよ...」

リエが代表して、リカと会うまでのいきさつを話した。

「成程...何はともわれ本当に助かりました...！この埋め合わせは必ず.....！」

「そんなのいいのよ...お気になさらず...」

最年長のカナメは、温かく微笑みながらリカに話した。

「...それにしてもどうしてここにやって来たの？聞かせて頂戴よ～」

ジュンコは、リカが何をしに来たが、気になって体がムズムズしていた。リカは食事を止めて、先輩たちに真相を話そうとした。

「.....実は任務でやって来ました...！」

「...裏の仕事か...駅前の騒ぎはあなたの仕業ね...？」

リカは、リエの問いに静かに頷いた。

「.....神戸のターミナル駅で起きたテロ事件が関係しているの？」

続けてジュンコがリカに質問した。

「...はい、被疑者を追っていましたが...見失いました」

リカは酷く落ち込み、OGたちは、彼女を元気づける言葉がしばらく見つけれなかった。

「...番組の途中ですが臨時ニュースをお伝えします...今朝未明、阪急今津線、宝塚南口駅付近で電車の事故が起こりました.....」

「...！」

リカたちがいる喫茶店には、一台小さなテレビが設置されており、地元の情報番組が流れていたが、突如臨時ニュースに切り替わった。リカたちは、自然とテレビ画面に釘付けとなった。

「現在入ってきた情報では突如、車内で何か破裂した後に煙が広がり、その騒ぎが原因で運転士が急停車したようです...煙を吸った乗客は、頭痛や吐き気の症状があるため緊急搬送されましたが、乗客の一人の的確な指示により、負傷者の人数は予想より少なかったとのことですが、この勇敢な乗客については不明です...また車内で銃声のような音が鳴り響いていたとの情報も入っており、警察の発表では、迅速に犯人を特定し、今回の犯行が先日、三宮の駅構内で起こったバイオテロ事件と関連性があるかどうか捜査するようです...新情報が入ればまたお伝えします...」

「...あらやだ...すぐ近くじゃないか...恐いわ～」

「...そういえばさっき駅付近で騒ぎになってたな...この事件が原因か...」

店のマスターと常連客は、不安げな表情を浮かべながら一緒に臨時ニュースを観ていた。

「...さっきからパトカーのサイレンの音がやたら聴こえてくる...かなり街が荒れているようね...」

「.....皆さん、どうもご馳走様でした...！私そろそろ行かないと.....」

「...そう、気を付けてね、もう少しゆっくりと楽しい話をしたかったんだけど...前の対談企画は楽しかったわ...落ち着いたらまた会いましょう！」

ジュンコは、リカの肩を軽く叩いて元気づけた。

「ほんと、あんたもOGの仲間入りするわけだし、歴代のトップスターを集めて話がしたいわ～」

リエは、名残惜しそうにリカを見ていた。

「...いい気分転換になりました...食事代は必ず返しますので...！」

「ここは払うけど...これからどうする？お金がないと困るでしょう.....？」

「そうですね.....！」

リカが困り果てる中、カナメは無言のまま、彼女に五、六万円ほど手渡した。

「...とりあえずこれだけあれば安心でしょ？」

「...え？ちょっと...こんなにも頂けません！！」

「まあまあいいじゃない、ちょっとした卒業の祝い金よ、持って行って！」

カナメは、無理やりリカの上着のポケットにお札を押し込んだ。

「.....借りが出来ましたね、ちゃんと返しますから...！」

「...ええ、期待して待ってるわ、ちゃんと問題を片づけてからいらっしゃい」

「はい、今度は私が皆さんにご馳走しますので...！」

リカは、OGたちに深々と頭を下げ、標的の搜索を再開するため店を出た。

「.....あの娘、いい目をしていましたね...」

「もう彼女は立派なプロよ、表でも裏でも成長していつている...彼女なりに私たちの教えを守ってくれた...」

「本当に見違えましたよ、初めて会った時は何考えているか分からない大人しい娘だったのに...」

歌劇団OGたちは、リカの今後の活躍に期待していた。

同じ頃、そこはリカが所属している劇団の大劇場ロビー、丁度、公演の休憩時間で多くの観客が集まって寛いでいた。しかしながら、その中に観劇とは別の目的で、訪れた者が居た。

一人は、お洒落に着飾ったセミショートの髪型の女性、もう一人は、ラフな服装で眼鏡をかけた地味な男性であった。謎の男性は、謎の女性の隣に座り、手にしているスタイリッシュなデザインの鞆を彼女に渡そうとした。そして、怪しげな二人は、小声で何やら会話をしていた。

「.....途中トラブった...妙な奴が嗅ぎまわっている...どうにか撒いてきたが.....」

「.....まだこの辺は警察がうろうろしてるわ...あなたは、もうちょっとここに居た方が安全じゃないの？」

「...ああ、そこの喫茶店で一服するよ...」

「...私はもう行くわ...気を付けてね...」

「.....お前もな...確かにブツを渡したぞ...」

しばらくすると、怪しい二人の密談が終わったようで、女性の方だけ劇場内から去ろうとしていた。

大劇場を出ると、四季の花々や植物が植えられている地元で有名な歩道がある。リカはそこを歩いており、偶然にも劇場内に居た謎の女性とすれ違うことになった。

ここではお互い知らない関係となるが、また二人は接触することとなる。運命の日はすぐであった。

第四話 テロのレシピ

リカを巻き込んだ電車事故から、数時間が経とうとしていた。どこのテレビ局も電車事故についてのニュース番組を放送し、事件が起きた地区だけではなく、日本の全国民が連続する物騒な事件に恐怖を感じて震えていた。

朝居恒彦、犯人がようやく特定され、彼は指名手配され、公安部派遣チームだけでなく、陰で地道に捜査をしている地元警察も精力的に動こうとしていた。

夕日が神戸の街を赤く染めて後、徐々に空が暗くなり夜となった。ミナコは店員に扮して、店のテレビでテロ関係のニュースを観ていた。

「...コツコツ」

その時、ミナコが居る店に足音が近づいてきた。

「.....あら、お帰り～」

「.....ただいま...」

リカはくたびれた顔を浮かべ、基地に帰還した。

「...ずいぶん遅かったわね...」

「...実は財布を落としちゃって.....怒ってる？」

リカの言う通り、ミナコはご機嫌斜めのような様子であった。

「...ちょっとね...下の連中もピリピリしてるわ...」

「...悪いわね、見事に逃がしたわ...」

「...あなただけのせいじゃないわ...奴を甘く見ていた.....！」

「.....うん」

リカは、静かに頷いた。

「.....車内に充満した煙の分析結果が出たわよ...性質は無色無臭の可燃性ガス...火災で起こる第一段階の煙と似た性質で有毒ではあるけれど、殺傷能力はないわ...先日、駅構内で使用された物とは別物.....症状は軽い頭痛やめまい程度...咄嗟のあなたの応急処置のお蔭で、搬送された乗客はすぐ退院できるでしょう.....」

「よかった.....」

「.....もし、あの車内で例の化学兵器を使われたらあなたはここに居ないわよ...」

「そりゃそうだ...」

「...それにしても財布を落とすなんてついてないわね.....」

ミナコは、やたらついていないリカを少し気に掛けた。

「...今日は厄日だわ...」

「.....」

ミナコは、呆気にとられ言葉がなかった。

「まあ大したもの入ってないからいいんだけど...」

「...まあね、ホテルの宿泊代は組織が払っているわけだし...証明書とかもダミーなわけだし...中身に何が入っているか覚えてる...?」

「...確か飲食店の割引券と...三千円と小銭が少し入っていたかな~...」

「...本当に大したもの入ってないわね.....何処で落としたか心当たりは?」

「.....さてね~標的を監視してる時はあったと思うけど...」

「一応、駅に問い合わせてしてみましようか.....それでここまでどうやって帰って来たの?まさか歩き?」

「ちやうちやう!標的の搜索をしたのよ、交通機関もしばらく麻痺してたし.....お金は親切な人から借りたの.....」

「……！よくそんな人に巡り会えたわね」

「本当に助かったわ…」

ミナコは軽く髪を掻き耷り、呆れるばかりであった。

「…お金貸してくれた人に感謝しないと…名前とか連絡先とか聞いた？ちゃんと返すのよ…！」

「…分かってるよ！この任務が終わったら返しに行くよ！」

リカは、歌劇団OGに会ったことを内緒にしようとした。

「……まあいいわ、そろそろ下に行きましようか？新しい情報が入ってるかもしれない…」

「そうね…」

リカとミナコは、対策部へと足を運び、様子を窺った。

「……何か新しい情報は…？」

ミナコは、ユカに訊ねた。

「…丁度良かった…！標的、テロ実行犯とされる朝居恒彦の住家の場所が分かったわ…！」

「！」

「…やったわね、うちの調査隊が？」

「…いえ、地元の警察の足よ…彼らも躍起になってる…汚名返上するために…！」

「……美味しいところは、全部持って行く気？」

「…場は弁えている……捕らえるのはこっちの仕事だ……どうする？」

「.....ようやく主役が帰って来たわ...今度はいいところを見せてもらいましょう...」

「.....！」

地下のスタッフは、リカを睨み付けた。

「.....任せて大丈夫なの？もう失敗は許されないわ...！今朝は未遂で終わったけど、次は恐らく本気よ...」

「...分かってるわ、もう失敗しないから...」

「...彼女に任せましょう...場所を教えてあげて...」

「...分かった...これが住所だ...」

「ありがとう.....ユカ！」

「.....結構ここから距離があるわね...民間の交通機関を使うのは避けましょう...ついて来て...」

リカは、ミナコの言われるがままついて行き、地下対策部から出た。二人は賑やかな商店街を抜けていき、大型倉庫がある場所に向かった。ミナコは、一つの倉庫の前で足を止めて、そのシャッターを開けようとしていた。

「...これは？」

そこは専用のガレージで、中には一台の車が納車されていた。

「...あなたの新しい相棒よ...」

リカの目の前にある車は、アルファロメオ・8Cコンペティツィオーネであった。

「さすがは同期で戦友...車の好みは把握済みね...」

「...もう少し色々と付け加えたかったけど、充分役に立つわ...大事に使ってね...」

「はいはい...」

リカは、ミナコから車のキーを受け取ってさっそく乗り込んだ。

「...ハンドルの横に長方形の溝みたいなのがあるでしょ...？そこに今朝渡した専用のタブレットを挿し込んでみて...」

「...これって...！」

「...これで車のGPSが作動して、何処までもあなたを追跡出来る...カーナビやオプション操作は、全てタブレットで出来るわ.....」

リカは、ミナコの指示通りにして、車体のカラーリングを赤色から自分の好きな紫色に替えてみた。

「それじゃあ行ってくるわ...」

「油断しないでね～」

リカは窓を開けて、そこから手を振り車を発進させて、テロ実行犯である朝居の住家へと向かった。

リカの愛車ロメオは、高級ブランド店やお洒落な洋館のネオン光に包まれ、まるでそれはCMのワンシーンであった。

ロメオは、神戸の摩天楼を抜けて、人里離れた山の方へと走行して行った。振り返れば美しい夜景が見渡せ、車が進んで行くのにつれて小さくなっていった。奥に進んでいくと、街灯が少なく人がなくなっていく。そこは、ホラー映画のように幽霊が出てもおかしくない地域であった。

容疑者である朝居の住家は、廃墟のような団地密集地であった。団地は、山中に建っているため、冬は非常に寒く、今年は、異例の爆弾低気圧の影響で風に当たると、体に痛みを感じるほどで、若干吹雪いていた。

リカは、適当に車を停めて現場に向かおうとした。

「...今から奴の部屋に向かうわ...」

「...了解」

リカは、地下対策部のメンバーと連絡をとりながら行動を開始した。彼女の服には小型カメラが取り付けられており、その映像は対策部にリアルタイムで送信される。

リカは、まず目の前の古びた階段を駆け上っていき、数分後、朝居が住家になっている棟へと辿り着いた。

「...本当にここって人住んでんの？お化け屋敷じゃん...」

「つべこべ言っていないで行って...！三〇二号室よ...」

文句を言っているリカに、ユカは叱咤した。中は電灯が切れていて暗いため、リカはタブレットの光をライト代わりにした。地面を見ると、ゴミがやたら落ちていて足場が悪かった。彼女は慎重に進んでいった。

「がさ...」

その時、リカの前で物音がして、妙な気配を感じた。

「.....ぎゃあああああ！！！！」

「...！？どうしたの、リカ！！！」

リカは、何かに驚いて腰を抜かしていた。

「.....大きな鼠が.....！」

「...はあ？」

「...鼠じゃなくてウリ坊よ...山の中なんだから居てもおかしくないでしょう...？」

地下対策部の人間は、リカに呆れていた。

「もう嫌だ...こんなところ.....！」

リカは、ぶつぶつと文句を言って目的地に到着した。

「.....着いたの？間違いない...？」

「待つて、確認するから.....表札は汚いけど、確かに朝居...と書いてある...」

「.....中で気配を感じる...？」

「.....静かよ.....留守みたい...」

扉についてある郵便受けには、一週間分の新聞や郵便物で溢れていた。

「...中に入れそう...？タブレットにピッキングの道具が.....」

「.....鍵が開いてる！このまま中に入ってみるわ...」

「了解...気を付けて...」

「.....う.....！」

「...どうした？」

「.....ここ...鼻に刺さるような異臭が.....！」

室内は生臭さが漂い、リカは咄嗟に鼻をつまんだ。そして、暗くて視界が悪いため、リカは灯りの電源を押した。

「...うわ...！」

灯りをつけた途端、リカは驚きを隠せなかった。玄関からごみで溢れており、とてつもない劣悪な環境で足の踏み場がなかった。

「.....こんなところに泥棒が入るわけないわよね～...」

リカは、袖で鼻をおさえながら部屋の奥へと進んだ。玄関からすぐ左に部屋があり、まずその部屋を調べようとした。その部屋は綺麗だと言えないが、異臭があまりせず片付いている方であった。目立った点といえば、本棚にきちんと並べられた専門的なお堅い本と数えきれない大学ノート、大きな上質紙がいくつか散らばっていたり、薬品の名前が書かれた瓶が置かれていたことであった。リカは、そこから何かテロに関する手掛かりがないか物色し始めた。

「...これは！」

「...何か見つかった？」

「間違いなく彼の部屋だわ...」

ノートの中を確認すると、細かい字でびっしりと書かれていた。地下対策部で待機しているミナコは送信された映像で確認した。

「.....書かれているのは化学式！大判紙の方は設計図のようね...それじゃあこの部屋で例の化学兵器を...！」

リカは、他に何かないと押入れを開けた。すると、そこには毒ガス発生装置で使われたポンプと空のポリ容器、アタッシュケース等があった。これで紛れもない証拠が揃ったのであった。リカはさらに物色し、机の上にあるパソコンが気になっていた。そのパソコンは、かなり古い生産中止になったウィンドウズのデスクトップであった。リカは、好奇心でパソコンの電源を入れた。

「.....！」

画面上にはいくつかのフォルダが表示されていて、フォルダ名は「極秘書」となっており、開くと中には三つのファイルがあり、一つは、化学兵器の成分や装置の設計図がデータ化されたものであった。二つ目は、新聞の記事をスキャンしたもので、それは、朝居が起こした実験事故についての記事であった。そして、最後の一つは日誌となっており、開けてみると数年の出来事の記録が保存されていた。

「.....まめな男ね.....どうでもいいことも事細かに.....」

リカは、ざっと読んでいき、今年の日誌に注目した。

...九月×日曇り、今日は自分の中で記念すべき日だ、ついに世界をひっくり返す道に一步踏み出せた。ある実験を試そうと思うが、一人では心細い...私の考えに共感してもらえる仲間が欲しい、この日から同士を集めようと考えた。

「.....十一月×日晴れ.....これってのはじめのテロ事件が起きた日.....！」

今朝は肌寒さを感じたが、天気には恵まれた。実験場所を選んだのは子供の頃、よく遊びに来た懐かしい地下街だ。今回は人間に害があるか調べるため、被害の幅は最小限に絞った。仕掛け人には早起きしてもらい、打ち合わせ通り公衆トイレに仕掛けてもらった。運命の時刻が訪れ、緊張の中、悪魔の薬を撒いた。実験の結果、見事に成功した。被害状況はほぼ計算した通

りで思わず腕を振り上げ喜んだ。これで第一段階は終了である。

「...十一月×日小雨.....駅構内でテロ事件が起きた日.....！」

「...ガサ...！」

するとその時、リカの背後に人影が現れた。それはここの家主であった。

「.....」

「...お帰り、遅かったわね...先にあがらせてもらってるわよ...」

「.....何をしている.....？」

家主である朝居は、低い小さな声でリカに質問を投げ掛けた。

「.....警察みたいなものよ」

「.....そうは見えないが...」

「...まあね、副業みたいなものだから...手帳はないけど本物よ、今、騒ぎになっているテロ事件を捜査すると、ここに辿り着いたわけよ.....あら？今朝見た時と雰囲気が違うわね.....？」

「.....お前だったか、俺を尾行していたのは...！」

「私の気配に気づいていたのね...逃げるためなら手段を選ばないのね...さすがに焦ったわ...車内でテロを起こすかと.....！」

「.....実験するには小さい空間だ...さらなる実験を試すには、より広い空間が必要だ...！」

「...やはり、また何処かでテロを発生させる気ね...もうそっちの思い通りにはならないわよ...！」

「.....」

朝居は、リカに脅されるが、意外に冷静な表情を浮かべた。

「.....わざわざそっちから来てくれるとはな...これは手っ取り早い...お前は色々知りすぎ

た……！！」

すると、朝居から凄まじい殺気を感じて、リカは、野生の熊と出くわしたかのように目線を合わせつつ警戒した。

「…私を殺す気？度胸があるわね……」

朝居は上着の裾をめくり上げ、隠していた小銃を取り出し、リカに発砲しようとしていた。

「……………！！！」

リカは、瞬時に朝居を押さえつけ、銃を弾き飛ばした。それでも朝居は、怯まずリカに立ち向かった。

「バコ…！」

リカは、少し手加減して、彼の顔を殴打した。

「……！？」

リカの殴打はあまり効いておらず、朝居は余裕の表情を浮かべた。

「…へえ、優男に見えるけど意外ね…」

「見かけで判断しないことだな……」

その時、リカの目つきが変わり、朝居を黙らせようとした。乱戦が続き、二人は部屋を荒らしまわり、長年ため込んだ埃やごみが派手に舞った。

「…よくこんな場所で頭が働くわね……」

「……この悪環境が妙に落ち着いてね…長時間研究に没頭出来る…」

「不潔だとモテないわよ…！」

二人は、冗談を交えながらそろそろ決着をつけようとしていた。朝居が先手を取り、襲い掛かろうとするが、リカは、彼の攻撃を流して、巧みな連続技をお見舞いした。朝居は防御が追い付

かず、そのまま倒れこみ気を失った。

「ふう……オツムは優れているようだけど、力はこっちが優れていたようね…」

リカは、服の埃をはらってから仲間に連絡した。

「……それで彼は殺してないでしょうね？」

「…ご心配なく、気持ちよさそうに眠ってる…しばらく起きないわ…」

「…じきに地元の警察がやって来る…顔を合わせたら、家宅捜索は彼らに任せてあなただけ戻ってきて！」

「了解…」

リカは、警察が来るまで大人しくなった朝居と二人きりで待機することとなった。朝居の身柄は、地元の警察に預けられ、署に連行された。

家宅捜索で、犯行の証拠となるものが次々として出てきているため、事件は解決の方向へと進もうとしていた。

しかし、まだゆっくりと腰を下ろすことは出来そうになかった。リカは急いでミナコたちが居る対策部に帰還した。

「…彼は今、警察署で取り調べを受けて、刑事の質問に対して黙秘を続けている…まあ証拠品は押収しているから、観念するのは時間の問題ね…一応落ち着いた……？」

地下対策部のメンバーは、安堵の表情を浮かべるが、リカだけ腑に落ちない表情を浮かべていた。

「……何か言いたそうだね…」

ミナコは、思い詰めたリカに声を掛けた。

「……どうも胸騒ぎがしてね…気になって一応部屋からこれだけ持ってきたわ…」

リカが持ってきたのは、ノート数冊とフロッピーディスクであった。

「.....今時、フロッピーディスクとは...」

「...古いものに愛着があるようね...携帯も折りたたみ式だし...うちは何でも揃っているから大丈夫よ...」

そう言ってミナコは、フロッピーの中を調べるため、対応している旧式のパソコンを用意した。

「ノートには化学兵器の性質や調合の仕方が書いてあるわ...」

「フロッピーのデータにも化学兵器のことが...あとこれは...日誌ね」

「ええ、テロを起こした日のこともちゃんと記録されている...これで終わったとは思えないのよ.....」

「.....分かったわ、一応調べましょう...膨大な量だからコピーして分担しましょう...まだ事件が起こることを考えると...今までテロが発生した時間は朝方...真夜中は考えにくい...まずテロが起こる時間と場所、共謀者の身元について徹底的に調べましょう.....」

分析班はリカの勘を信じ、直ちに作業にかかった。

「...あの男、銃を持っていたわ...」

「そのようね...今朝起こった電車事故についてだけど、車内に数発の弾痕があつて、薬莖が転がっていた...使用された銃はP 2 2 0 9 mm拳銃...」

「...P 2 2 0 9 mm拳銃...それって海上自衛隊仕様のハンドガンじゃ.....?」

「...そうよ、モデルガンならまだしも、本物なんてそう簡単に手に入らない...」

「...共謀者の中にそういった関係の人間が居るかもしれないわね...」

「...そういうこと...ってさっきから気になっていたんだけど、あんた匂うわよ...!」

「あれ...?ちゃんとホテルのお風呂入ってるんだけど...今日は朝からバタバタしてたし、あの男の部屋、異常なほど汚かったのよ...毒ガス並よ...!」

「...ちょっと汚れを落としたら？...お風呂も入った方が...」

「...今のうちにそうさせてもらうわ...ホテルに戻るとするか...」

「戻らなくても近くに銭湯がある...そこに行って...」

「.....あんたもね...ミナコ君...！」

「え？」

「...最近、徹夜が続いてろくに休養とってないでしょ？ここは私たちに任せてリカと行って来たら？」

「そうよ、行こうよ！」

「...それじゃあ、お言葉に甘えて...」

データ分析をユカたちに任せ、リカとミナコは、束の間の休息を取るため、近くの銭湯に向かった。その銭湯は昔ながらの伝統あるもので、公安の潜入捜査班は、よく利用していた。

「...銭湯なんてどれくらいぶりかな～？」

「たまにはいいものよ...」

二人は、重い鎧と化した衣服を脱ぎ捨て浴場に足を踏み入れた。座椅子に座り、背中を流そうとする時、ミナコはあることに気づいた。

「...これ本当にあんたの体？前に温泉行った時はすべすべだったのに...」

リカの体を見ると、至る箇所に痛々しい傷が刻まれていた。ミナコはその傷を見て驚愕した。

「.....これくらいしょうがないわよ...勲章みたいなものよ...」

「.....そうだけど、今の医学ならどうにかなるわよ...」

「...今の仕事落ち着いたら考えるわ...」

リカは平然として、体の傷を気にも留めなかった。リカたちは体を洗った後、湯船に浸かり疲れた体をほぐした。リカは、ミナコの体型が気になっている様子であった。

「...そっちは全然体型変わんないわね...何か特別なことを...？」

「...いいえ、特には...適度な運動と栄養ある食品を口にすることくらいかな...私、健康食の専門家でもあるし...」

「あなたって本当に器用よね...私なんか転職難しいと思うわ...今の仕事好きだし...」

「.....仕事なんてゆっくり探せばいいわ...あなたなら直ぐにお呼びが掛かるでしょう...」

二人は湯船に浸かりながら雑談を交わし、しばらく体を温めてから浴場を出た。リカは、体を拭いてからフルーツ牛乳に手を伸ばし、中年オヤジのように飲み干していた。脱衣所には一台の古いテレビがあり、あいかわらずテロ関係のニュースが放送されていた。

「♪～」

その時、ミナコのタブレットに着信が入った。それはユカからであった。

「...そろそろ戻りましょうか...収穫がありそうよ...」

リカたちは、駆け足で地下対策部に戻った。

「...保存データは大体目を通した...次に起こるテロのことが分かったわ...！」

「...今度は...また神戸？」

「.....いいえ、神戸じゃない.....大阪よ...！決行時間は明朝の九時三十分...」

「.....え...明日...？あと少しで日付が変わるわ...」

「...大阪とはね...大阪府警にも協力を要請しないと...」

「もう連絡はしてある...兵庫県警の捜査員も大阪に向かっている...！」

「...テロが発生する場所は...大阪の何処？」

「...JR大阪ステーションよ...」

「.....またターミナル駅...！」

「...決行時間も丁度混雑になるラッシュ時...！とんでもない数の犠牲者が出るわ.....！」

「...朝居の共犯者の身元も分かった、どうやらSNS、コミュニティーサイトで知り合ったようよ...朝居が身動き取れない今、残った仲間が犯行を起こす可能性が高い...仲間は、ほとんどが社会復帰出来ない前科者や元暴力団関係者だった...今、地元警察が判明した共犯者を捜索している...例の兵器をどうやって仕掛けるかはまだ分かっていない...朝居が吐くのを待つしか...」

「そんなの待ってられないわ...！どうせ黙秘を続けるでしょう...リカ、とりあえず大阪に行ってくれない？」

「え...？うん、了解！」

「よし...そうとなれば駅に包囲網を張って民間人を避難させないと...化学兵器のことは分かり次第すぐに知らせるということで...！」

作戦会議は終わり、リカは即座にジャージから新品のスーツに着替えて、武器を備えて大阪に向かおうとした。

第五話 運命を導く広場

朝居の書き留めた日誌を読み解いたテロ対策チームは、テロ行為を阻止すべく、リカをテロ発生現場の大阪へと派遣しようとしていた。

「...あれ？」

「...私も同行するわ、じゃじゃ馬の監視をしないとね...運転手として使って...！」

リカは、ユカに車のキーを渡して助手席に回った。

「...それじゃあ頼んだわよ！」

ミナコは、リカたちに希望を託した。

ユカの運転は荒っぽく、豪快なドリフト走行を披露して、あっという間に高速道路に飛び乗った。深夜の時間帯は、車の数が比較的少なく、渋滞がないため、スムーズに走行できるように思えた。

しかし、彼女たちの行く手を阻む怪しい影が既に潜んでいた。サイドミラーに怪しい後続車が映っており、リカたちは薄々勘付いていた。そして、後続車の黒のレクサス二台が本性を見せてスピードを上げて強引にリカたちが乗っているアルファロメオの横についた。

「...あんたらとデートしている時間はないのよね～」

ユカは軽く冗談を呟いて、アクセルを強く踏んだ。そうすると、レクサスはロメオについて行き、きつく車体をぶつけた。その連中は、朝居の仲間であった。

「私の相棒を傷つけないで...！」

リカたちが乗るロメオは、二台のレクサスに挟まって窮地に追い込まれそうになったが、どうにか蹴散らし先方へと出た。レクサスはタイヤがスリップして、コントロールを失いかけたが、どうにか立て直して前方のロメオを追った。

「...しつこいな～」

リカたちが追手のしつこさに苛立つ中、追手の方は、窓を開けて銃器を構えていた。

「...どうしても大阪に行かせたくないのね...！」

「.....ドガガガガ...！」

追手が撃った弾がロメオに目がけて発射され、さらに状況が乱れた。しかし、ロメオは防弾加工しており、全く心配なかった。タイヤをパンクさせようとするも、そこにも特殊加工されているので問題はなかった。ユカは気にせず運転しているが、それでも追手は諦めずにロメオに妨害を続けようとした。

「...！」

その時、一台のレクサスがロメオの前につき、進路方向を塞ごうとした。

「...！！」

そのまま追手は銃を乱射して、ロメオの走行を妨害した。ユカはブレーキを掛けようとせず、ロメオは前方のレクサスに激しくぶつかった。レクサスは、コントロールが利かず、横転して近くで走行している車両と衝突した。それで一台のレクサスは追跡不能となった。まだもう一台のレクサスが残っており、激しいカーチェイスが続くこととなった。

しばらくしてカーチェイスのことに気づいた警察は、パトカーと白バイ隊を出動させサイレンを鳴らし、二台の車を追っていた。リカたちのことは知らされており、警官隊は、彼女の車を援護しようとした。

「...賑やかになってきたね～」

リカは、今の事態を楽しんでいるようであった。追手のレクサスは、パトカーに囲まれながらも蹴散らしていった。どうにか警官隊から放れた追手は、再びロメオの横につこうとした。

「...！」

その時、リカは半分ほど窓を開けて、追手の位置を確認した後、上着の胸元の内側に手を入れて銃を取り出した。彼女は銃身を後ろにスライドさせ、安全装置を解除した。

「...ドンドン...ドン！」

その後のことは一瞬のことであった。自慢の早撃ちで片側の前輪後輪に命中させ、レクサスはそのまま派手に横転した。横転したレクサスはパトカーに囲まれ、ようやく邪魔者が居なくなり、リカたちは、テロの標的となった大阪へと直行しようとした。

「.....え？」

しかし、地獄のドライブはまだ終わりそうになかった。突如、後方に一台のトレーラーが現れ、猛スピードでまっすぐリカたちが居る場所に向かっていった。

「.....緊急事態だ、謎のトレーラーが高速で暴走している...！」

謎のトレーラーは、障害となるパトカーを容赦なく蹴散らしていき、リカたちに追いつこうとした。

「...何なの？こいつ...！」

謎のトレーラーは、ロメオの前方へついて道を塞いだ。またもや、進路を妨害されたリカたちであったが、さらにトレーラーに異変が起きた。つながれているコンテナが開き、中から巨大な機関砲が姿を見せ、武装集団も潜んでいた。

「.....ドドン...ドドンドン！！」

機関砲は、リカたちが乗ったロメオに照準を合わせて発射した。

「...ちょっと冗談じゃないわよ！」

リカたちは奇襲攻撃を受け、パニックに陥っていた。また、武装集団も辺りかまわずライフルで乱射を始め、警官隊は防戦一方であった。たちまち、高速道路上は炎と黒煙に包まれ、騒ぎは拡大していく一方であった。

「ドゴオオオオオオオオ...！！」

ロメオは、爆風で吹き飛び、激しく横転した。車体は、大きなダメージを受けて運転不能になったが、リカたちは軽傷だけで済み、かろうじて生きていた。

「...万事休すか...！」

リカたちは、大阪に行くのを諦めて覚悟を決めた。

「.....ヴオオオオオオオオ...」

その時、リカたちにかすかなエンジン音が聴こえ、音は次第に大きくなっていった。

「...何？」

その正体は、一台のバイク、カワサキゼファー1100と一台のランドローバーであった。謎のライダーは、すぐさまリカたちの居る場所に向かい、バイクに乗った状態で刀を抜いた。

「...ズバババババ.....！」

「...ぐえ.....！」

そして、ライダーはリカたちを囲んだ武装隊員を次々と斬って行った。どうやら新手ではなかった。

「...ドン...ドドン.....ドン！」

ランドローバーのドライバーも味方のように、運転しながら武装隊員に向けて銃を発砲した。

謎のライダーはバイクを降りて、横転したロメオに向かい、リカたちを救おうとした。車内から引きずり出されたりカたちは、訳がわからないままライダーに礼を言った。

「...あなたは一体？」

「.....」

ライダーは、リカの質問に答えようとヘルメットを脱ごうとした。

「...！！」

リカたちは、ライダーの素顔を見た瞬間、目が点になった。

「.....あいかわらずヤンチャしてるな～」

「...し...師匠！どうしてここに？」

謎のライダーの正体は、リカたちの先輩であった。

名はエリ。劇団の魅力溢れる実力派スターとして君臨し、百周年の年に退団した。退団後は、テレビやイベントの仕事を中心に行っている。また、裏稼業も継続して行っている。剣技を得意とし、剣道初段だが、それ以上の剣技が身につけており敵を圧倒する。リカは、エリを崇拜しており普段「師匠」と呼ぶ。

「...エリさん、助けてくれたことは感謝しますが説明してもらえますか？」

ユカも予想外のことで、かなり驚いている様子であった。

「...そう怖い顔しなさんな、説明したいけど、ここじゃあ話せないね～」

「.....ドン！」

その時、リカはエリの合図に気づき、背後に居る武装隊員を撃った。

「...お見事、でもあんたたちはこんな雑魚に手こずっている場合じゃないやろ...？ここは私たちに任せて...」

「...私たち？」

すると、リカたちの近くにランドローバーが停まった。

「...あなたは！」

「...変なところで会ったね、リカ...」

ランドローバーに乗っていたのもリカたちの先輩であった。

名はヨーコ。元歌劇団トップスター。長い下積み時代を経験して、トップの座に就いた男役舞台人の一人。外見は妖艶で冷静であるが、たまにお茶目な一面を見せる。そこはリカと似ている。彼女はリカにトップの座を譲り、退団した後は、個性派舞台女優として名を広めている。また裏の世界では、孤高の狼として恐れられている。

「...説明は後ですから、とりあえず車に乗って！」

「...え？ヨーコさんの車に？」

その時、リカたちに隙ができ、武装隊員は機関砲でまとめて倒そうとした。

「.....バババババババ」

「...？」

武装隊員が機関砲を撃とうとした時のことであった、空から何やら物音が聴こえ、見上げると、一機のヘリコプターが飛んでいた。

搭乗者の一人はヘリの扉を開き、大型ライフルを構えてあるものを狙っていた。標的は機関銃であった。すぐさま照準を合わせて搭乗者は狙撃した。

「...ドズン！ドンドン！！」

ライフルの轟音が鳴り響き、機関砲は一瞬で破壊された。狙撃した搭乗者は、機内でどや顔を浮かべた。使用している武器は、対戦車ライフルといって、その名の通り、戦車の分厚い装甲を簡単に貫通出来るほどの威力がある。

「.....あれもまさか...！」

「...仲間や、ようやく揃ったわ」

ヘリから狙撃している者の名は、マユ。元歌劇団トップスターの一人であった。優秀な成績で歌劇団に入団したエリートで、完璧なダンスと表現力を武器にファンを魅了してきた。エリと同じく百周年の年に退団して、現在も舞台の世界で活躍中。裏の世界では腕のいいスナイパーとして活動している。

「...下は賑やかですね、久々に興奮しています...」

ヘリの操縦をしているのは、現役歌劇団スターのミチコであった。

当初、彼女は地味な方であったが、地道にキャリアを積んでいき、実力ある舞台人へと成長した。そして、長年脇役を演じてきた彼女も努力が実り、遅咲きではあるがトップの椅子を手に入れることとなった。裏社会でも彼女の存在が知れ渡り、多くの犯罪組織が彼女の手によって潰されている。また、あらゆる免許を取得しており、ヘリの他、重機や戦車、船なども巧みに操ることが出来る。

「...マユさんとミチコさんまで.....手を貸してくれるんですか？」

「...別にあんたたちのためやないで、早く車に乗らないと本気で怒るで...」

リカはエリの迫力に圧され、指示に従ってヨーコが運転するローバーに乗り込んだ。しかし、ユカは乗ろうとしなかった。

「.....私は残るわ、ここで先輩たちと戦う、後のことは頼んだ...」

「...ユカ！」

「...よう言った、ここは私らで食い止める、早よ行け！」

「.....分かりました、お願いします！」

リカは、先輩たちにこれ以上ない恩義を感じ、先に進もうとした。ヨーコは、エリたちに視線を送った後、車を発進させた。武装集団はリカを襲おうとしたが、それをエリたちが許すわけがなかった。

「...あんたらの相手はこっちや、遊び相手になってもらおうか...！」

エリ、ユカは地上で、マユ、ミチコは空から残りの敵を倒そうとした。
同じ頃、大阪市内某ホテル

ホテル内のバーで、一人の謎の女性が人気のカクテルを飲んでいて、落ちついているように見えるが、何度も携帯画面を確認していて、苛立っている様子であった。誰かと待ち合わせしていたのか、相手は来る気配がなかった。その女性は、しばらくしてからバーを去って行った。

それから時間は過ぎて次第に空が明るくなっていき、朝日が顔を出そうとしていた。リカとテロリストは、ついに対峙することになったのであった。

夜が明ける数時間前 場所は神戸、公安地下対策部。

テロ対策部チームは、全員一睡もせず、朝居のフロッピーやノートを隅々まで目を通して情報を集めていた。同時に現在のリカたちの状況を確認していた。

「.....大阪方面の高速で事故発生.....彼女たちの車が巻き込まれた模様...不審車両の奇襲を受けたようだが無事...GPSを確認...通信も可能...」

ミナコは、リカの安否を気遣っていた。

「.....聴こえる？リカ...？」

「ええ、聴こえるわ.....」

「.....尾けられてたようね...分かってると思うけど、朝居の仕業だわ...！」

「...かなり物騒なものを持っていたわ...プロ並みよ.....！」

「...彼は裏の世界の人間とつながっているわ...気を付けて...！」

「.....分かってる...ユカとは別行動を取ってるの...今はヨーコ先輩に大阪まで運んでもらってる」

「...話は聞いたわ、ヨーコさん、リカのことをよろしくお願いします！」

「...あいよ～」

ヨーコは、ひょうひょうとした態度で応答した。

「...朝居は今どうしてる？」

「...沈黙したままよ...」

「もう自分抜きで作戦を実行させる気ね...」

「.....まだ仲間の手掛かりは掴めてないの...」

「.....そのことだけど、心当たりがある...任せて！」

「...それは本当？」

リカは、自信に満ちた表情を浮かべた。

「.....あの、今日使用される化学兵器の解析が終わりました！」

「...報告を！」

リカと話している最中、助手がミナコに報告しようと歩み寄った。

「...性質は第一、第二のテロとほとんど同じですが...問題は被害範囲です...」

「...範囲は？」

「.....発生後、約半径二十キロ地点までが被害に...！」

「.....それって駅構内だけの騒ぎじゃない...大パニックよ...一瞬で死体の山になる...」

「...押収したアタッシュケース...今までのと比べるとかなり小型よ...これなら運んでいても怪しまれない...持ち運び便利なおうえに威力は強力...！彼は実験を繰り返し、ついに自分が思い描いていた兵器を完成させたのよ...」

リカも対策部にいるミナコたちの会話を聞き取り、参加した。

「...リカ、保存されたスケジュール表のようなものに意味深な文章が記されているわ...！」

「...読んで...」

関西の中心都市での行為は、予行練習にすぎない。本番は国家の核である。

「...これを意味するのは首都東京...！真の目的よ...！」

「...彼ならやりかねないわ...立派なテロリストよ！もうこれ以上騒ぎを大きくするわけにはいかない...何としても阻止して捕らえないと...！」

「.....リカは私が責任を持って現場に届ける...また何か進展があれば連絡を！」

「はい、了解しました！それではまた...」

ユカはヨーコの指示に従い、ひとまず通信を切った。

「...これからどうするおつもりですか？」

「...まだテロ決行まで時間がある...とりあえず大阪府警の方に向かうわ...話はつけてあるから協力してくれるはず...それで一緒に現場に向かう...」

「...了解しました！本当に助かりました」

「.....私はただ頼まれただけよ、提案したのはミチコよ」

「...ミチコさんが...！」

「...彼女は、あなたたちとは別に密かに捜査をしていたのよ、こうなることは想定済み...タイミングを見計らって私たちも動くことにした...」

「...そうだったんですか」

「...彼女、敵は多いけど、味方はそれ以上に多いしね...軸はぶれず世界中の全ての犯罪を追っていてもおかしくない...一番敵にたくない人物よ...」

リカは、改めて偉大な先輩の存在を知った。

「...事態は予想以上に深刻のようですね」

「.....私たちはあくまでも脇役よ、主演のあんたがそんなに弱気でどうするの？」

「ヨーコさん...」

ヨーコは姉御肌の一面を見せ、リカを叱りつけた。

「...まだあんたがすべきことは終わっていない...気を抜かないことね...」

「...そうですね、すみません」

リカは、歌劇団時代、ヨーコと舞台に立ったことを思い出した。彼女は、ヨーコの言葉で表情が凜々しくなった。ヨーコはリカの様子を見て安心していた。

空はすっかり明るくなっていき、朝日を浴びたりカたちは、直ちにテロを阻止すべく対策を練った。そこでまた、リカはあるサプライズを受けることになる。

一方、ユカたちはリカたちが去った後、武装集団と激戦を繰り広げ、無事に勝利した。しかしその結果、道路上は荒れ果て、とても車が走れる状態ではなかった。道は混雑し、多くの車両が列を作り、酷く渋滞していた。ユカたちもしばらく待機していた。

「.....以前起きた震災を思い出すな...全く無茶をする...！」

ユカは無線でミナコに連絡を取りながら溜め息をついていた。

「.....まだ油断は出来へんで、本番はこれからや...」

エリは、自分のバイクにまたがりながら淡々とユカに話し掛けた。

「.....リカだけでは手に負えないようですね...」

「...ああ、だから一人でも多く仲間が必要なわけや...ちょっと行ってくるわ...」

「...リカを助けに行くつもりですか？」

「...ああ、こんな所に居ても仕方ないんでね...後は頼むわ...」

「.....私もついて行っていいですか？」

「...え？」

「...足手まといにはなりません、どうも体が疼く...やはり椅子に座っているより現場の方が合ってるようです...」

「...好きにしな、もう行くよ」

エリたちは、ミチコが操縦するヘリに乗り込んでテロ現場へと向かった。

テロ現場となる大阪駅付近上空では、報道ヘリが飛び交い、各テレビ局が現場中継を行っていた。何とも言えない緊迫感が伝わり、一般市民は警官隊の指示に従って、避難をしていたが、避難者数は数千人居るため、列が乱れたり、嚴重なボディチェック、荷物検査が思い通りに進まず、事態は難航していた。

避難用のバスが用意されるも、交通機関にも影響して麻痺状態であった。駅構内にはまだかなりの一般市民が残っており、そこに朝居の仲間が潜んでいた。

それからテロ発生予告時間まで一時間を切り、ようやくリカとテロ対策部隊が到着した。かなり駅から人だかりが減ってきてはいるが、まだ避難させるのに時間が掛かりそうであった。もう

全員避難させることが出来ないと踏んだりカたちは、テロ行為を阻止しようと、犯人と化学兵器に接触しようと考えていた。もう犯人の見当はついているようであった。

J R大阪ステーション 時空（とき）の広場

そこは駅構内橋上駅の五階にある公共の広場で、駅のホームを見下ろせる待ち合わせ場所が存在する。そこにはまだ多くの一般市民が残っていた。

順番に警官が誘導する中、リカは長い列を潜り抜けてある場所で足を止めた。そこは待ち合わせ場所として使われているベンチであった。一人ぼつんと座っている者が居て、その人物は、全身を黒で統一された服装で身を纏い、サングラスをしてどうも怪しかった。

「.....だいぶ空いてきましたよ...並ばないんですか？」

リカは、ベンチに座っている人物に何かを感じながら声を掛けた。

「.....私、目が不自由でね.....この騒ぎで付添いとはぐれてしまいました.....」

声を聴くと若い女性で、リカに並ばないわけを説明した。

「.....目が不自由...本当に？」

「ええ...」

リカは、座っている女性に疑ってかかった。

「...では何故さっきから広場の時計がある方を気にしているんですか？お持ちの携帯タブレットもちらちらと見ているし...明らかに時間を気にしている...見え透いた嘘ついても無駄ですよ...テロリストさん！」

「！！！」

リカは、だいぶ前から座っている女性のことを監視していた。

「.....よく分かったわね...！」

テロリストの女は、芝居がかった口調を止めて本性を表した。

「.....仕事だからね...ここに居る人たちはテロの脅威で恐怖を味わっているけど、あなただけ違

っていた...テロが成功するかどうか不安になり緊張している...それとその小型のアタッシュケースは解析済みよ...！」

「...あなたね、彼が言っていた女は...！」

「.....リーダーは牢獄の中よ...メンバーももうあなただけでしょ？一人で片づける気...？」

その時、テロリストの女は静かに微笑んだ。

「.....別に朝居が居なくても続けられるわ...彼のこと、リーダーとも仲間とも思っていないし...ただ、目的が一緒だっただけ...他のメンバーもそうよ...」

「...目的とは？」

「...今の腐りきった社会を崩壊されることよ...！！」

「！！！！」

「ドガガガガガガガ.....」

その時、テロリストの女は隠していた自動小銃を発射した。

「きゃー！！！！！！」

場内に悲鳴が鳴り響き、騒然となっていた。しかし、発射された弾は、リカが即座に彼女の腕を掴んで、強引に銃身を天に向けたため、誤射となり一般市民に命中しなかった。

「...いい反応ね...」

「...どうも、あなたも私と似た臭いがする...特殊な訓練を受けているわね...！」

「.....昔の話よ...大きな花火をあげる前に久々に暴れられそう...」

「...！」

テロリストの女は、抵抗してリカの腕を振りほどいた。

「ドバババババ.....」

テロリストの女は、再び自動小銃を乱射した。それと同時に複数の気配が動いた。

「...民間人をこの広場に近づけないで！！」

リカは、声を張り上げて警官たちに指示して一人で食い止めようとした。駅構内にはテロリストが数えきれないほど潜んでいたのがあった。

一方、公安地下対策部

対策チームは、テロリストの女について調べ上げていた。

「...ビンゴね、珍しく彼女の勘が当たった...作業を分担していたのね...朝居がブーツを作り、女がブーツを仕掛ける...」

「この女だったか、まさか女だったとは...変装していると分からないものですね...」

「.....着ているのは紳士ものよ...背も高いし、男性の仕草をしている芸達者...二件のテロ事件の際、この姿で男子用トイレに入っているし...これで勝手に男だと思いこんでいた...」

「...彼女の経歴が出ました...！」

城ノ内結城 三十八歳 東京都出身。三姉妹の末っ子。元海上自衛隊自衛官、階級は一等海士。三十三歳の時に除隊し、それから企業家に転身するも失敗が続く。自衛官時代の体験をつづった自伝書籍が出版されるがすぐに廃刊となる。個人のブログやホームページは今年の一月に凍結。

「.....一部の経歴が削除されてるわね...」

「はい、自衛官時代のことが抹消されています...」

「.....自伝書籍がすぐに廃刊になったことと関係が...？ネットでの書き込みも全て削除されているのね...」

「.....除隊となった五年前の新聞を調べると関連した記事がありました...！」

「.....これは！？」

「...名前は公表されていませんが、年齢や階級が一致...彼女に間違いありません...小さく取り上げられているので見落とすところでした...」

「...上官から強姦、暴行を受ける.....これね、除隊となった理由は.....」

「何か臭いますね...これで彼女の人生が大きく変貌したのでは.....?」

「...何やら知らない場所で陰謀が渦巻いているようね...続けて調べて...!」

「了解...!」

同じ頃、騒ぎとなった駅広場は、多くの一般市民が激しく逃げ惑った跡があり、リカと城ノ内は、睨み合ってお互い目的を果たそうとしていた。

第六話 業火の駅

テロの標的をされた大阪駅周辺は、銃弾の雨が降り注いで戦場と化していた。

テロリストと戦っているのは、警官隊だけではなく。それはリカが率いる歌劇団メンバーで、黒やグレーのスーツを身に纏った精鋭たちである。

「.....やれやれ、のんびり出来ると思ったのにこんなことが起こるとはね...」

「.....そう文句言わないで下さい、もし、千秋楽の日に事件が起きていたら台無しですよ、きたさん！」

ヒロコとアスカは、会話をしながら次々と標的を倒して行った。ヒロコは銃火器で撃ち続けて派手に暴れ、アスカは、二丁拳銃で華麗な銃さばきを披露していた。他に注目の戦士が参戦している。

名はクミコ。学生時代から芝居が好きで歌劇団の入団を決意した。歌劇団に導く専門音楽学校は二度目で合格した。あらゆる役柄に挑戦し、キャリアを積み、成長を遂げている。趣味はアニメ鑑賞。裏の任務では、中世の旧式装飾銃を備えて日々活動している。

「...リカさんに格好悪い姿見せられないね...少しも気は抜けない...！」

クミコは、リカの目を気にして戦っているようであった。

「ええ.....私たちの成長見てもらわないとね...」

もう一人の若手ホープの名はアキ。母親が歌劇団ファンだったため、その影響で自分もファンになり、公演を観劇したことで、舞台の仕事で活躍する可能性を試そうと考えていた。そして念願叶い、入団した彼女は、恵まれた体型を活かし、着々と成長を遂げた。

裏稼業では秘密工作員として、敵地に乗り込んで壊滅している。戦法は接近戦やトラップを得意とする。

アキは、アーミーナイフで次々とテロリストを倒していった。

ここでは紹介しきれないが、他にも優秀な劇団員はたくさんいて、リカは皆と顔を合わせた時、さすがに驚いている様子であった。

また、ヨーコも以前、同じ班に属しており、リカの前任でトップスターを務めていたことから、かつての劇団仲間と感動の再会を果たすこととなった。

「...ドドドドドドン！」

突如、火力がある散弾銃の弾が発射され、現役歌劇団メンバーは、すかさず回避した。

「.....何処の馬鹿？」

ヒロコは、散弾銃を撃った者と目が合った。

「...し...死死死死死！今日は愉快だ...！やっと銃が撃てる！！」

「...これは放ってはおけないわね...」

その狂ったテロリストは、身長が二メートル以上ある筋肉質な男で、体中に強力な武器を装備していた。

本名、神成信哉 三十五歳 銃マニアで陸上自衛隊に所属していたが、隊員を無残に射殺し、危険薬物使用の疑いもあるため、除隊となり、リストから抹消された。刑務所に何年か服役した経験があり、釈放後も密かに悪行を続けている。

「...俺を楽しませてくれるのはお前か？」

神成は、ヒロコを気に入っている様子であった。

「...複数で掛かれば、あんな奴すぐ黙らせますよ...」

「.....いいえ、私一人で十分よ...あいつで鬱憤を晴らす...！」

ヒロコは、アスカの案を受け入れず、一人で神成に立ち向かおうとしていた。

一方、リカと城ノ内は、お互いの仲間の様子を確認していた。

「...頼もしいわね、あなたの仲間は...」

「どうも.....ところでそれ、64式小銃...自衛隊専用の武器ね...？」

「...ええ、詳しいわね...」

「...昔、演習で使ったことがある...使い勝手がいい...暴れている仲間に武器を提供したのはあなたね...?」

「こういったことは専門だからね...」

「...その化学兵器が入ったケース...遠隔操作で作動するんじゃないの?その役目はあのいかれた博士...」

「前の二件ではね...被害範囲から離れてから朝居に連絡して、遠隔操作で作動させた...でも今回は新作...直接装置の電源を作動させることが可能になった...」

「...それはそれは、でもあなたも巻き添えになるわけでしょ...?」

「そうね...だから...?」

「...自分の野望のためなら命を懸ける...なんて気障な台詞でも言うつもり?」

リカは、何故か不敵な笑みを浮かべた。

「...何か知ってそうね...?」

「.....朝居の部屋にあるものが大事に保管されていた.....解毒剤は完成されていたのね...?」

「.....もうお見通しか...ええそう、つまり、私たちテロリストだけ助かるわけよ...」

「...現在の状況はこちらが不利...時間も迫ってるし、力づくであなたの野望を阻止させてもらうわよ...!」

「ふふ...あなたに私の暴走が止めれるかしら?」

「...いい気になってんじゃないわよ...」

二人の間に火花が散り、ついに死闘が始まろうとしていた。

まず城ノ内が得物の自動小銃を構え、リカに向けて発射した。すかさずリカは弾を避け、自分も銃を取り出した。

「ドン...ドドン...」

リカは、反撃して自慢の早撃ちを披露した。彼女は、例のケースから城ノ内を離そうと考えていた。

「カシン...」

「！」

その時、城ノ内の自動小銃が弾切れになり、補充する弾がないため、そこらに放り投げた。その直後、彼女は上着を脱ぎ捨てて身につけていたハンドガンを抜いた。

「...！」

その時、リカは城ノ内の方に飛びかかり、彼女の銃を遠くへと弾き飛ばした。

リカは、銃撃戦を止めて接近戦に持ち込もうとした。先手はリカで、重い殴打の連打が続き、城ノ内は防戦一方になった。

「.....どうしたの？...このままでいいの...？」

「...ふん」

城ノ内は不利な状況を何とも思わず、鼻であしらった。

「...バゴ！！」

その時、リカの拳が城ノ内の顔面を抉った。城ノ内は、殴打の衝撃で地面に叩き付けられた。

「...あら...当たっちゃった...やば」

リカは、少し城ノ内を心配している様子であった。

「.....！」

しかし、城ノ内は、何事もなかったかのように静かに立ち上がった。さすがにリカは驚き

が隠せなかった。

「...クリーンヒットしたはずだけど、平気なの？」

「...ちょっと痒いかな...」

「...そんな...気絶するくらいの威力のはずなのに.....ショック...！」

「.....私を普通の人間と思わないことね...手加減しなくて結構よ.....」

「言ってくれますね～」

「.....アタッシュケースのある場所からだいぶ離れた...あなたと遊んでいる暇はない...私は忙しい...」

次は城ノ内から攻撃が仕掛けられた。

「...！」

リカの顔に城ノ内の強烈な蹴りが振り上げられ、彼女は瞬時にそれを防いだ。

「...これは！」

リカはなにやら異変に気づき、蹴りの衝撃で数メートル吹っ飛ばされた。さらにリカが体勢を整えた時、前方に城ノ内の姿がなく、城ノ内はいつの間にか上空へと飛び上がっていた。そして、そこから急降下してまた強烈な蹴りを浴びせようとしていた。

「ドギャ.....！」

リカに目がけて放たれた蹴りは、広場の地面が大きくひび割れるほどの威力であった。

「...あら外した？」

リカは、どうにか攻撃を回避していた。

「...今のは回避して正解ね...にしてもこの威力...！！」

リカは、城ノ内の常人以上の力に動揺していた。

「...余裕な顔が出来なくなったんじゃないの...？」

「...そうね、ここまでとは...あなたを甘く見ていたわ...」

「...そろそろ時間だし諦める？」

「...そうはいかない、私には多くの命運が懸かっているからね...」

「.....往生際が悪いわね...あなたの負けよ...」

城ノ内は勝利宣言し、ケースがある方へと疾走した。リカはそれを阻止すべく、がむしやらに立ち向かった。

城ノ内は弾き飛ばされた銃を手に取り、すかさず発砲した。リカは、それを避けながら城ノ内の懐に入ろうとした。

「...バキ！」

リカの拳がまた城ノ内の頬に命中したが、やはり効いておらず、彼女は諦めず続けて攻撃をした。城ノ内の体の至る箇所にもリカの強烈な打撃が命中するが、城ノ内は決して怯まず、タフな一面を見せた。

それに引き替え、リカは少々呼吸が乱れていき、無駄に体力を消耗していた。

「...もうお疲れのようね...必死にやってるけど、あなたの攻撃には迷いがあるように思える...任務のために人を殺めることはどうってことないでしょ？あなたの組織は...」

「.....」

リカは、城ノ内の言葉にすぐ反論出来なかった。

「...上司はあなたに任せて後悔しているでしょうね...とんだ腰抜けよ...」

「.....うちの組織も好きで人を殺めているわけじゃないわ...それにあくまで最終手段よ...何より人を守ることを重要視している...例えそれが残忍な悪党でもね...私は、あなたをこれ以上悪事に手を染めさせないよう救ってみせるわ...！」

「.....とんだ茶番劇ね...そんな綺麗ごと聞きたくなかった...もっとクールだと思っていたけど...」

「...うちにはうちのやり方がある...そっちは昔居た組織に不満があるようね?.....どうして前の職場を辞めたの?」

「.....!!!」

その時、リカの言ったことに対し、気が障ったのか、城ノ内の中の何かが切れた音が響いた。気づけば、リカの目に前には鬼の形相をした城ノ内が立っていた。

「.....!」

リカは対応が間に合わず、胸ぐらを掴まれていた。城ノ内の驚異的な怪力でリカの両足は地についていなかった。

「!.....うが...!」

リカは抵抗出来ずにいて、もがき苦しんでいた。

「...リカさん!!」

仲間たちがリカを心配するが、彼女は決して手を出すなど目で合図した。

「いい心掛けね.....あなたは毒ガスではなく私の力で死ぬのよ...」

「.....!」

リカは、超人となった城ノ内の前に太刀打ち出来ず、危険に晒されていた。

テロによる恐怖の時間はまだ終わりそうになく、絶望の時間が近づきつつあった。テロリストの数は半分ほど減ったが、戦力はなかなか低下しなかった。若手の歌劇団メンバーの方は、疲れた表情を浮かばせていた。

「...長引けば不利だ...リカさん急いで下さい...!」

アスカたちは不安を抱え、リカを気にかけていた。彼女は、テロの主犯である城ノ内に手こず

「...ふん」

二人は睨み合い、鬪牛のように突進してお互いの体をぶつけた。結果、体格差でヒロコの体が数メートル吹き飛ばされた。

「.....何処に所属しているか知らんが、鍛え方が違うんだよ...チビ！」

ヒロコはすぐ起き上がり、何故か笑っている様子であった。

「.....うちの部隊では高い方なんだけどね...おたく、でかくなりすぎて頭まで栄養いってないでしょ？」

「...あんだと？このアマ！！」

ヒロコは神成を軽く挑発し、不敵な笑みを浮かべた。

「.....馬鹿力だけど、実はたいしたことないね...はっきり言ってがっかりだ！おたくより強いのは、うちにたくさんいるよ」

「...まだ言うか！！」

「...おたくらとはレベルが違うんだよ！私たちは何度も地獄を経験して一緒に強くなった...格の違いを見せてやるよ...」

「ほざけ...！！！！」

「.....！」

その時、神成の怒りの拳がヒロコの顔を抉ったが、彼女の方は、ぴくりとも動かなかった。

「.....何！？」

「.....あれ？なんか痒いな、冬場に蚊に刺されたと思った.....」

ヒロコは、神成の大きな腕を撥ね退けて余裕の表情を浮かべた。

「...効いてないのか？」

「当たり前じゃん！」

「.....お前、化け物か？」

「おたくに言われたくないね...最初見た時、新種のゴリラかと思ったよ...」

「...馬鹿にするのもいい加減にしろ！今のは手加減したんだ...！」

「...あっそう、じゃあ次は本気でやりなよ、一分間何もしないから...」

「...いいのか、後悔するぞ」

神成はヒロコの言葉に甘えて攻撃を続けようとした。ヒロコは一切抵抗せず、全体に神成の攻撃を浴びていた。

「.....？」

神成は休まず攻撃を続けるが、何か違和感を覚えていた。攻撃を受けているヒロコは、ずっと無表情で体勢が変わらなかった。彼女の足腰はしっかりしており、鉄のような強度であった。あっという間に一分が過ぎていき、神成は体力を消耗し、攻撃を止めた。

「...はあ、はあ、はあ.....」

手を休めた神成は息が上がり、大量の汗を流していた。

「...あっ終わった？眠りそうだったよ、一分経ったからそろそろ反撃させてもらうよ...」

「...！！！」

神成は初めて恐怖を感じて、顔が引きつっていた。

「.....いいかい？パンチっていうのはこうするんだよ.....！」

「.....ボゴオオオオオオ！！！」

ヒロコは神成の腹部を殴打し、その拳は深くめり込んだ。神成は思わず腹部を手で押さえ、地

に膝をついた。

「.....あが.....！げほ...」

神成はダメージを受けて、まともに喋ることが困難で嘔吐して苦しそうであった。

「...だらしのないな～大の男が...そろそろ終わりにするよ...」

「.....！」

「...バゴオオオオオオ！！」

ヒロコは、長い足で神成を蹴り飛ばした。威力は凄まじく、彼の巨体は駅の大階段まで飛ばされ、そのまま階段を転げ落ちていった。これでヒロコの勝利が決まった。

「.....おたくは独房がお似合だよ...」

ヒロコは、そう沈黙した神成に語りかけ、脱いだベストを拾い上げた。

「ヒロコさん、リカさんが危険な状態です！」

「.....！」

ヒロコはリカの状況を耳にした途端、静かに目を閉じた。そして、自分のタイミングで口を開いた。

「.....おいこら！！！！！！！！何ちんたらやってんだ！！！！シャキッとせんかい！！！！！！」

ヒロコは、無線から張り裂けそうな声を出してリカに呼び掛けた。歌劇団メンバーは、あまりの音で一斉にイヤホンを外した。

「...そうだリカさん、踏ん張って下さい！」

歌劇団メンバーは、リカにエールを送った。

「.....自ら開発した痛覚を麻痺させ、筋力を一時的に増強させる薬は、効き目が強すぎて危険なため実用化までに至らなかった...」

「...！！！！」

リカは、ヒロコの声で意識を取り戻した。その直後、何故かミナコが言ったことと、朝居と接触した時の場面が頭の中によぎった。

「.....なるほど、あなたの実力じゃなかったのか...！それじゃあなおさら負けられないね...！」

「.....何をごちゃごちゃ言っている？」

城ノ内は、リカの胸ぐらを掴んだ状態で地面に強く叩き付けた。地面はあまりの衝撃で、ひび割れて陥没していた。彼女は、苦しんでいるリカの姿を予想しているようであったが、それは見事に外れていた。

「.....変態博士の薬の力は、その程度？」

「ああ？」

「.....ガブ！！」

その時、リカは城ノ内の腕を思いきりかぶりついた。

「うわー！！」

城ノ内はあまりの痛さに耐えられず、すぐにリカから離れた。

「.....ぺっ！今のは効いたでしょ...私って猪くらいの顎の力あるからね...！」

城ノ内の噛まれた箇所は、若干出血していた。

「...お前は吸血鬼か...！」

「.....何か馬鹿らしくて一気にあなたのことが怖くなくなったわ...」

「...何！？」

「...お仕置きしないとね...！」

リカは、そう言い捨て最後の反撃に出た。

城ノ内も受けてばかりせず、攻める方に徹した。お互い強烈なダメージを与えるが、倒れようとせず、踏ん張って死闘を続けようとした。

「.....！！？」

ほぼ力は互角かと思いきや、リカの動きに変化があり、ラッシュが止まらなかった。城ノ内は、あまりのスピードについていけず、サンドバッグ状態となった。リカは、華麗な武術の舞を披露していた。

「...言っておくけど、今のあんたより空腹状態の私の方が怖いよ...！」

そう冗談を言ったリカは、最後のひと蹴りで城ノ内をダウンさせた。

「.....あ...が...こんなことで...！！」

城ノ内は、かなりのダメージを受けているため立ち上がることが出来ず、匍匐前進の体勢で、ケースがある場所まで移動しようとした。彼女は最後の力を振り絞り、毒ガス発生装置を作動させようとしていた。

「...ドン...！」

「.....！」

城ノ内がケースに手を伸ばそうとした時、リカはためらわず引き金を引いた。撃たれた城ノ内は、そのまま力尽きた。

「.....やれやれ、馬鹿につける薬はないと言うけど...探せばあるものね...」

リカが撃った弾は、ミナコからもらった麻酔弾なので城ノ内は眠っているだけであった。これでテロは阻止されたかのように思われたが...まだ解決とはならなかった。リカたちには更なる災いが迫ろうとしていた。

「...ゴオオオオオオ」

突如、空からある物が降ってきた。

「！……何だあれは！？」

空を見上げると、猛スピードで落下する物が近づいていた。それはミサイルのようであった。

「……………ドーン！！！！！！」

複数のミサイルは、駅構内に着弾して大爆発を起こした。着弾場所付近は瞬く間に炎が広がり、周辺にいる者に被害が及び、しばらく立ち上がれずにいた。

リカも着弾時の衝撃波に巻き込まれ、倒れて込んでおり、意識はあるが一時的な聴覚障害で周りの音が聴こえなかった。

「……ちっ新手か！」

ヨーコは被害現場に駆けつけ、仲間の無事を確認した。

「随分と団体さんで来ましたね…」

アスカがそう言うと、空には輸送ヘリ一機、戦闘ヘリ三機が姿を現して上空から駅を包囲していた。

「……テロは阻止した…目的は……彼女か…！」

勘が鋭いヒロコは、急いでリカたちがいる方へと向かった。しかし、ヘリ部隊はそれを妨害しようとした。戦闘ヘリが歌劇団メンバーに攻撃を仕掛けて来たのであった。戦闘ヘリは、装備された火器を乱射していき、駅構内は再び戦場と化した。歌劇団メンバーは必死に迎撃するが、戦況は不利であった。

輸送ヘリは、タイミングを見計って城ノ内を救出しようとしていた。ヒロコたちは弾幕を張られ、なかなか前に進むことが出来なかった。

リカは、今までの激しい戦闘のダメージが蓄積され、体が思うように動かせず、もう打つ手がないように思われた。

「……バババババババ」

その時、またローター音が聴こえ、別の一機のヘリが現れた。新手かと思われたが、そのヘリ

は戦闘ヘリに攻撃を仕掛けた。

「...あれは！」

ヨーコは、すぐにヘリの正体に気づいた。

「.....燃料を補給していたから遅くなった...下はえらいことになってますね...」

「...テロは...リカたちはどうなったの？」

ミチコたちベテランメンバーが助っ人として現れたため、戦況は変化しつつあった。

「...よし、これで若干有利になった...何としても救出を阻止するんだ！...あと、リカを探
すんだ！」

「...了解！」

ヒロコたちはヨーコの指示に従い、速やかに行動に移った。

駅上空では壮絶な空中戦が起こっていた。障害物となる高層ビル群は、無残に機関銃で撃ち抜かれていき、多くの破片が地上に落下していった。

「...ドガガガガガガ」

マユは、機内から大型機関銃で攻撃し、ユカもライフルで応戦していた。また、ミチコの巧みな操縦テクニックで相手のヘリに喰らいついていた。

「.....ドドン...ツドン！！！」

一機の戦闘ヘリは、マユの攻撃に耐えきれず制御不能になって、ついに墜落した。

「...よっしゃ！！」

「...攻撃する時は注意して下さい、下にはまだ人が居ますので...」

「...ああ、分かってる！これでも計算して撃ってる！」

ミチコは、マユの返答に笑みを浮かべた。

「...バキン！！」

「え？」

その時、ミチコたちは隙を作ってしまい、もう一機の戦闘ヘリの攻撃を受けた。直撃は免れたが、被弾した機体は制御出来ず、飛行出来る時間は、ごくわずかであった。

「...駄目だ、もう限界だ！」

機内がパニックに陥る中、マユだけは何故か平然としていた。彼女は、マグナム銃を構え、高度が下がって行くヘリから戦闘ヘリを狙っていた。発射された弾は、燃料タンクに命中して、被弾した戦闘ヘリは爆発炎上を起こした。

「...さすが、アクションスターみたいやったで〜」

「えっへん！狙った獲物は逃がへんで〜」

エリとマユが冗談を言い合っている中、彼女たちを乗せたヘリは、誰も居ない車道に不時着した。ヘリは地面に激突したショックで破損した。

「ドゴーン！！」

ベテランメンバーは、機体が爆発する前に脱出することが出来た。

「.....私たちはここまでだ、あとは駅構内のメンバーに任せるしかない...」

ユカたちは、リカたちが無事に生還することを祈った。

戦闘ヘリはまだ一機残っており、容赦なく歌劇団メンバーに攻撃を続けていた。

「.....あれは！」

激しい銃声が飛び交う中、ヨーコとヒロコは負傷したりカを発見した。

「...怪我は少々酷いが、息はちゃんとしている...救護班に連絡を...！」

ヨーコたちは、リカに応急処置をして安全な場所に運ぼうとしていた。

一方、意識を失った城ノ内は、仲間の輸送ヘリの中であった。ヘリ部隊は目的を果たし、駅から去ろうとした。

こうして、城ノ内を確保することが出来なかったが、大規模の危害が及ぶテロを阻止することが出来て騒ぎは収まりつつあった。歌劇団メンバーは、長期戦で疲れ果て地面に寝そべった。

第七話 偽りの終幕、誠の序幕

大阪でのテロ騒動は収まり、駅構内の歌劇団メンバーは、増援部隊と合流した。駆けつけたミチコは、ヨーコに歩み寄った。

「...すみません、たいして力になれなくて...」

「.....いいや、よくやってくれたよ、助けが来なかったら皆やられていたかもしれない...」

「.....それにもし、バイオテロが発生していれば大阪は死の街になっていたかもしれない...彼女はよくやってくれましたね」

「ああ、しばらく見ないうちにちよつとは成長したようだね...」

ヨーコは、さりげなく後輩のリカを褒めていた。

大阪駅周辺は、至る場所から火災が起きたり煙が立ち込めたりして、新設された四分の一のエリアが破壊されていた。ターミナル駅には大きな傷跡が残ったが、被害は最小限に抑えられた。奇跡的に一般市民には一人も怪我人が出なかった。警官や歌劇団チームには怪我人が出たが、致命傷は受けておらず、入院するほどの怪我ではなかった。

リカは命に別状はないが、大きな治療が必要なため、大阪市内の病院に入院することとなった。

リカたちの活躍により、脅威のバイオテロ事件は未遂に終わった。ちなみに化学兵器の解毒剤が発見されたことで多くの命が救われ、平和な日常が戻ろうとしていた。

数日後、リカは昏睡から目覚め、病室でテレビを観ながら呑気に酢豚弁当を食べていた。

「んま！」

「よくもまあ病み上がりでそんなに食べられるわね...」

お見舞いに訪れたミナコは、リカを呆れて見ていた。

「...昨日から何も食べてないのよ...そのせいで力が出なかった...！」

「...無理しすぎよ、下手すりゃ死んでたわ...」

「...あれでも本気じゃないんだけどね～」

「もういいわ...それより逮捕した朝居の件だけ...彼の体内からも特殊な薬物の成分が検出されたわ...例の筋力強化剤...彼も服用してたのね...」

「...天才と変人は紙一重ね...あの頭脳はもっとまともなことに利用出来たはずなのに.....」

「...それは同感だけど.....彼は自分の能力に歯止めが利かず恐れていたかも.....だから解毒剤を完成させた...これで自分の暴走を止めようとしたんじゃないかな...?」

「.....彼女も朝居も孤独だったのね...」

「ええ...テログループのリーダー格は、やはりあの二人...偶然にも同じ時期に挫折して社会を憎み、手を組んだわけね...」

「.....城ノ内が朝居に武術や銃器の使い方を教えたんでしょ?」

「.....ええ、コミュニティーサイトで話しているうちに妙に気が合い、二人で野望を実現しようとした...一緒にいる時間は長かったけど、そこに友情や愛情などは芽生えなかった...まあ興味ないけど.....」

「...そうね」

「.....あっそうそう、あと一昨日の電車事故のことだけど...駅近くの河川敷で空の大型アタッシュケースと男性ものの衣服、それと車内で使用されたハンドガンも発見されたわ...科学捜査班に調べてもらって朝居の物だと分かった...!」

「...やはりそのまま逃げず、変装してたのね...あの大きなアタッシュケースにテロで使用する小型アタッシュケースと着替えなどを入れていたんだ.....私を撒いた後、変装した姿で城ノ内に会って例のケースを渡したわけだ...」

「あなたのようなプロを出し抜くとはね.....ああそうだ、これも朗報よ、昨日、阪急xx駅から連絡があったわ...あなたの財布見つかったって...」

「え!?マジ!」

「...大したもの入ってなかったけど、よかったじゃない、見つかって...いつでもいいから本人確認のために駅まで取りに来てほしいって...」

「ほ〜い！」

「.....なんか嬉しそうね〜そんなに財布見つかったことが嬉しいわけ？」

「まあね...」

リカは、ふと歌劇団OGと会った時のことを思い出した。

「.....さて、後処理はやっつくからゆっくり体を休めなさい...」

「...それは無理よ、明日は仕事がある」

「...え？」

「...明日は年末恒例の歌劇団のイベントがあるんだから...のんびりしてらんないわ...！」

「...ああ、あのほとんどの歌劇団員が出るショーね...今年は百周年だからより盛大になるわね...そんな体でちゃんと出れるの？」

「...大丈夫よ、エネルギー補給もしたし、もう退院できるわ...仲間を心配させたくないし...」

ミナコは、リカの逞しさに驚き、自然と笑みを浮かべていた。

「.....今年もあとわずか...これでひと段落したわけね...」

「.....いいや、これで終わりとは言わせないよ...！」

「...！」

そこにはリカの見舞いに訪れた、ユカの姿があった。

「...ユカ、仕事の方は落ち着いたの？」

「.....いいえ、少しだけ時間をもらったわ...リカに伝えたいことがあってね...」

「...私に？」

「.....テロの件だけど、確かにリカたちのお蔭で阻止出来た...でも彼女を...城ノ内を逃がしたのはまずかった...」

「.....それは」

リカはユカの言葉に敏感に反応し、沈んだ顔を浮かべた。

「...あんな奇襲は予想外のことよ！リカを責めないで！」

ミナコは、激しくユカに反発した。

「...勿論彼女だけのせいじゃない...神はなぜか城ノ内に味方した...また私たちは試練を与えられたわけよ...」

「...彼女の行方は？」

「...不明だ、煙のように消えた...総力を挙げて捜索中よ...」

「...まさかまた何か事件が起きるって言うの？」

ユカは、ミナコに深刻な表情で返答しようとした。

「...可能性は高い...被害規模は拡大していき、最終的に東京が狙われるでしょう...予告した文章もあったわけだし...朝居は黙秘したままで手掛かりが掴めない...！」

「...私も捜査に参加するわ！」

ユカは、リカの肩を軽く押さえて落ち着かせようとした。

「.....そう慌てないで、体は一つしかない...あんたにはまず大事な仕事がある...多くのファンが待っているわよ、表の仕事に集中して...！」

「...ユカ」

「それに相手はこっち以上に深手を負ってるはず...すぐ動けないわ...」

「...だといいいけど」

「実は...あんたに他に伝えたいことがあって来たんだ...」

「...え？」

リカは、ユカから予想外の言葉を耳にして見当がつかなかった。

「.....表向きは警察の活躍で解決したことになる...でも手柄はあんたのもの...本部はまだあんたの活動内容を知らない...よって伝える必要がある、一週間以内に報告書を部長に送信して...」

「え～めんどくさ～」

「あなたの一番嫌いな作業ね...」

ミナコは愉快に笑い、リカは覇気のない顔に布団を被った。

一方、こちらは東京 警視庁 公安部部長室。

部長である新沼は、ある人物を招いていた。彼は、招いた人物とチェスを交えながら楽しく雑談していた。部長に招かれた人物はリカの元相棒、安藤であった。

「...どうやら無事に任務を遂行させたようだな...報告書が楽しみだ...」

「.....これでまた彼女の株が上がりましたね...」

「...まあな、選んで正解だった」

「...それにしても今回のテロの件は...大きく的が外れたようですね...？」

「...ああ、相手は思ったより小粒だった...以前バイオテロを起こしたようなテロ集団を連想していたが...全く別物だった...まとまりがなくほとんど素人に近い.....かと言ってあなどれない...まさか民間人からテロリストが誕生するとはな...予測不能だ...」

「...表の顔は様々で...犯人の中に元自衛官が居たとか...？」

「ああ、何か気になるか？」

「...ええ、テロの主犯、城ノ内結城という女性についてです.....僕の友人に報道関係のライターが居まして...彼女のある情報を提供してもらいました...」

「...ほう！何か重要なことが...？訊かせてくれるか...？」

「...ええ、彼女にまつわる悲劇的事件は五、六年前に遡ります...城ノ内は海上自衛隊に所属していました...優秀でしたが、それを気に入らない連中が居たようで...彼女の先輩たちでした.....彼女は先輩たちに呼び出され、集団強姦された...それが何日も続き、彼女は廃人になりかけた...
...そして数週間後、彼女は強制的に除隊となった.....！」

「...その件は記憶にないな.....」

「...隠蔽しようとしたんですよ...上層部がね...！マスコミを味方につけて一面になるはずのネタが縮小されたんです...城ノ内の経歴も抹消された...」

「そんな不祥事が...そういえば少し耳にしたことがある.....元自衛官の人間がメディアの世界に進出したと...彼女だったのか...？」

「.....そうです、彼女は除隊された後、すぐに起訴しました...しかしあっけなく敗北した...強姦した連中は、今でも何食わぬ顔で自衛官として生きている...しかし、彼女は諦めなかった...自伝本の出版を通して、組織の闇を訴えたり、報道番組に出演して被害者であることをアピールした...ネットでも暴行を受けて負った傷や痣を公開したりと出来ることは全てやった.....」

「.....しかし、結果は...」

「.....すぐに潰されましたよ...証拠や記録は全て消されて、これでまた彼女の居場所がなくなった...」

「...彼女には悪いが無謀だ...相手があまりにも強敵すぎる...一人であんな巨大組織に敵うはずがない...！」

「...これがきっかけで彼女は変貌したわけです...怒りの矛先は組織ではなく、社会となった...」

「...そして今回の犯行を...！」

「...ええ」

「...有力な情報を聞いた...今度さりげなく防衛省に掛け合ってみよう...どういう顔をするかな...？」

「.....無駄なことですよ、全員グルでしょう...しらばっくれるに決まってる...！」

「...だろうな、それにしてもお前の友人はいいネタを持ってるな...」

「...ええ、今の仕事は始めたばかりですが、根性があるやり手ですよ...あらゆる不祥事を調べ上げるようです...」

「.....はは、頼もしいな、我々も注意しないと.....！！」

「...気に入らないことがあればすぐに隠したがる...体質は変わってないようです...」

安藤は、そう言ってチェックメイトした。

「やれやれ手加減を知らんな...」

「すみません...今日は勝たせてもらいました...」

安藤は、淡々した表情でお茶を啜った。

「.....お前はどのようにしてここを選んだ？」

その時、新沼の突然の質問に安藤の表情が一変した。

「.....危険なことが多いですけど、なんか居心地がいいんですよね...面白い人間もたくさんいるし...何より人として扱ってくれる...」

「...成程」

「.....ところで城ノ内の行方は分かったんですか？」

「.....いや、派遣捜査員からはまだ連絡が入っていない...捜索中だ」

「...そうですか、ここが正念場ですね？」

「.....そうだな、悪い予感が的中しなければいいが...」

安藤と新沼は険しい表情を浮かべ、この先の災いを予測していた。

週末、兵庫県を本拠地とする大劇場は、大変賑わっていた。年末恒例の大イベントで歌劇団全員のスターが舞台上で華やかに競演するというファンにとっては夢のようなものである。当然のことながらこの観劇チケットの争奪戦は激化していた。

勿論、リカも出演していた。トップスターとしての貫録を見せて、ファンの歓声を浴びていた。歌劇団員が、数日前のテロ発生現場にいたことは、一部の関係者しか知らない。やはりリカは、表稼業の方が、居心地がいいようであった。

三日続けて上演され、最終日は遠征している歌劇団員と中継をつなぎ、全員の競演が実現した。今年は特に百周年記念のこともあってか、歌劇団全員が集まる機会が多く、年末イベントで歌劇団百年祭は終幕することとなった。

リカも無事に自分の仕事を済ませ、ほっとしている様子であった。翌日はクリスマスイヴ、世間は幻想的なムードに包まれていた。

東京 某劇場

その場所では、ある舞台作品が上演されていた。公演チケットは、完売御礼で場内は大いに賑わっていた。公演の午前の部が終演して、出演者たちは楽屋で休憩していた。その中には歌劇団OGのカナメがいた。

「.....カナメさん、ファンの方からの手紙やお祝いのプレゼントが届いているんですけど...」

「はいはい～チェックします～」

「...あの一つだけ名前が書いてないものがありまして...」

「...そうなの...どれどれ...」

謎の人物からのプレゼントは、紫の薔薇の花束で茶封筒も添えてあった。封筒の中を確認するとお金と手紙が入っていた。カナメは、手紙の内容を黙読した。彼女はその直後、事前に笑みをこぼした。

「ふふ、かわいい娘ね.....また近いうちに会いたいな～」

カナメは、そう呟いてプレゼントを送った犯人を見抜いていた。

「.....ブワックシュン～！！！」

リカが大きなくしゃみをした。クリスマスの夜、彼女は歌劇団同期メンバーとクリスマスパーティーを開いていた。OGを含めた同期が集まるのは久々のことで、会場内は思い出話や近況などで盛り上がっていた。また、このパーティーはリカの卒業祝いのパーティーも兼ねていた。

「...あんたやっぱり風邪じゃないの？」

ヒロコは稽古の時のようにリカを気にかけていた。

「...う～ん、よく分からん、最近バタバタしてたから...」

「...リカ、今年はお疲れ様～来年の公演も観に行くからね～♪」

リカに同期メンバーたちが群がってやって来て、彼女のグラスにシャンパンを注いだ。OG同期メンバーはほとんど結婚し、子宝に恵まれ、自慢の我が子を一緒に連れてきていた。

「.....私も卒業すんだけどな～」

ヒロコは、ふてくされてヤケ酒を飲んでいて。

「どしたの？元気ないね～まあ飲めや～」

酔ったユカがヒロコの前に現れ、酌を始めた。ユカはかなり酔っていた。何はともあれ、その夜、どんちゃん騒ぎが続き、リカは終始嬉しそうであった。

次の日、リカは仲間と別れて、当然のように大劇場に足を運び、来年の公演に向け、稽古に没頭した。

二〇一四年、あとわずかで年が終わろうとしている。リカにとって内容の濃い年になったこと

は間違いない。激動の一年となったわけであるが、これで終わりではなかった。彼女の卒業までまだ時間があり、さらなる試練を待ち受けていることとなるが、それは年を越してからの話となる…。

二〇一四年、十二月某日 兵庫県某町

日本のエンターテイメント集団が集う歌劇団大劇場、無事に節目となる百周年公演を終えて、周辺はすっかり静かになっていた。あと数日経てば新年を迎えることとなる。夜が更けていき、大劇場内、大劇場に併設された事務所は、全く人気がなかった。ただ稽古場だけは様子が違っていた。ぎりぎりの時間まで稽古をしていた劇団員もキリのいいところで止めて、帰り支度をしていた。

「…お疲れ様でした～来年もよろしく～」

劇団員たちは、本年最後の別れの挨拶をして冷たい風を浴びながら帰宅して行った。

これで大劇場は完全に人が居なくなっただと思われたが、まだ稽古場に人影があった。その人物は、静かに薄暗い稽古場の床で寝そべっていた。

「…ゴドドン…ガタゴドン…ゴゴン…」

劇場付近には、河川があり、大きな橋が架かっている。電車が大劇場を回りながら走行されるのが有名で、劇団員は電車が通る音を耳にししながら取材を受けたり、レッスンに取り組んでいるわけであった。

最初は五月蠅く感じるだろうが、慣れれば心地いい音に聴こえるようになる。稽古場で寝ている一つの影は、ぱっと起き上がった。影の正体はリカであった。彼女は何も考えず、そこでぼーっとしていた。

「…あ～疲れた、そろそろ帰るか～」

リカは最後の自主稽古を終えて休憩しているようであった。気づけば一緒に稽古していた仲間たちは居なくなっていた。彼女は別れの挨拶をしたはずだが、とっくの昔に忘れていた。

「……………」

リカは、帰り支度をしようとして稽古場を出ようとするが、何故かぴたっと足が止まり、一度振り返った。

「.....もう来年はここに来ることはないんだね...」

リカは、しみじみと思ったことを呟いた。

「.....色々なことがあったな~」

リカは目を閉じて、稽古場であった出来事を思い出そうとしていた。

「.....ありがとう」

リカは、数分間目を閉じた後、稽古場に向けてお礼を言った。彼女は、名残惜しくなかなか稽古場から出ようとしなかった。その場に立っている空間も彼女にとって大事な存在であった。

「...！」

その時、リカは扉についている窓から覗いている人物に気づいた。

「...何や...リカか...」

「...あれ？まだいらしてたんですか...？」

リカと遭遇した人物は、歌劇団トップスターの一人、チエ。リカの一年先輩であった。彼女は、五年以上トップとして君臨し、リカが退団した後に退団することになった。彼女たちが退団することで、一つの歌劇団の歴史が終わろうとしていた。

「...ちょっと用事で通りかかってんけど、そっちは稽古か？」

「...ええ、まあ」

「...あいかわらず真面目やな...」

「...もう稽古出来る時間がないので追い込みですよ...」

「...そうか、年を越せば東京公演やったな...ついにこの劇場ともおさらばか...」

「...ええ、なんかこの場所は生き物みたいなものでなかなか出ることが出来ません」

「...そういえば二人でよく稽古したな、あれは私がトップになったばかりの時...あんたが二番手スターとして、うちの班にやって来た時...」

「...懐かしいですね、稽古中に怪我をしたことを今でも鮮明に覚えています...あの時はご迷惑をお掛けしました...」

「...ほんまにあれは焦ったわ...来たばかりやのに舞台に立たれへんと思った...本人より驚いてるで...でもそのお蔭で私がこうして生きてるわけやし...借りができたわ...」

「...そんな、チエさんには世話になってばかりなんで...！」

「.....ほんまに時間が経つには早いな...トップお披露目がつい最近のように思うわ...それから海外公演があつて...百周年の式典、祭典、ドラマやイベント出演、武道館ライブ...内容が濃い時間を過ごすことが出来たわ...もう悔いはないと言ったら嘘になるけど、そろそろ席を空けんとな...」

「...チエさんは長い間、先頭に立って努めてきましたからね...そろそろ世代交代つてやつです...」

「...そうやな、一緒に舞台に立っているメンバーはもう後輩が多いし...あとは皆に任せるか.....まさかりカが先に辞めるとは思わなかったけど...同じ年やからほとんど同時退社やな...」

「そうですね」

リカたちは、稽古場の至る場所に触れながら色々と語っていた。そして、稽古場の中心の位置に立って、お互い肩を組み合った。それは長年ともに戦ってきた戦友の姿であり、舞台のワンシーンのようであった。

「...さて、そろそろ帰りますか？」

「...ええ、警備の人が待ってますしね...」

「.....」

その時、チエは何か言いたげな表情を浮かべた。

「...どうしました？」

「...いや、もうちょっとええかな？」

「.....はい」

チエは深刻そうに口を開いた。

「...これはまだ黙っというて欲しいと言われたけど、あんたやから話すわ...！」

「...はい」

「...これは裏稼業の話や、先日のテロ事件に関わってたやろ？あんたたちの活躍で被害は最小限になった.....さすがと言いたいが、まだ解決とは言われへん...！」

「.....ええ、実行犯を逃がしましたから」

リカは、チエの発言で悔しい表情を浮かべた。

「.....済んだことは仕方がないことや...まだ挽回できる...もう奴らは関西には居てへん...次の標的は東京かもしれへん...」

「確か...朝居というテロ主犯の男が、テロの内容を記録していて、そこに書いてありました...間違いなく東京でしょう」

「...だとすれば、警視庁が総力を挙げて動き出す...うちらが所属している公安は、既に捜査を始めている...残党は何処かに隠れているはずや...」

「...私たちも派遣されるのでしょうか？」

「...勿論や、あんたは新年一発目に東京公演があるわけやし、奴らのことをよく知ってるからな...そのうち呼ばれるわ」

「...チエさんにもお声が...？」

「...ああ、しばらく表の仕事はお休みやからな...早速引き抜かれたわ...一緒に任務に就くことになるかもな...はは」

チエは苦笑いをして話した。

「.....来年も荒れそうですね...」

「...そうやな、賑やかなのは性に合ってるけど...」

「...来年もよろしくお願いします！」

「ああ、よろしく！」

リカとチエは熱く抱擁をしてさらなる絆を深めた。

それから数日経ち...

二〇一四年、大晦日、東京都内某所、まもなく年明けとなる。古びた人気のない雑居ビルにぼつんと明かりがついた部屋が一つだけあった。部屋の中には二つほど人影があった。

一人は女性で、カタカタと音を立て、机上に置かれたパソコンを使い、何かを調べていた。もう一人は男性で、その様子を黙って見ていた。

パソコン画面を覗くと、ある画像が表示された。それは先日起こった大阪でのテロ事件の記事であった。記事の内容を読んだ女性は、手が震え、眉間に皺を寄せており、機嫌を悪くしているようであった。その女性は城ノ内結城、テロの実行犯であった。

城ノ内は、大阪駅での激しい戦闘で負傷して警官隊に包囲されたが、増援部隊により救出された。彼女は関西を離れて、次なる作戦を練るため、場所を東京に移して静かに生活していた。彼女の体の状態は、万全ではなかった。

城ノ内は元自衛隊員で、辞めた後もトレーニングは欠かさず行い、女性とは思われない逞しい体を保っていた。しかし、今の彼女の姿はまるで別人であった。思ったより怪我の回復が遅く、生々しい傷跡が残り、体は急激に痩せ細り、髪の毛は雪のように真っ白であった。原因として考えられるのは薬の副作用であった。彼女は特殊な筋力増強剤を服用していた。

服用した増強剤は一定時間、攻撃力、防御力が格段にアップし、驚異の回復力が備わるわけだが、それはかなりのリスクを背負うこととなる。副作用で徐々に心身ともに蝕まれて死に陥る可能性が高いのであった。彼女はかろうじて生きているが、寿命は縮まる一方で危険な状態であった。

「.....やられたな、苦勞して練った計画は台無しだ...」

「.....そうね」

弱った城ノ内に話し掛けている男性の名は、緋岡浩伸 三十八歳。航空自衛隊のエースパイロットであったが、上官と衝突したことで除隊した。彼は嫌な予感がしたため、城ノ内を救出しようと出陣した。

緋岡もまたテログループの中心人物であり、頼れる人材であった。

「...人数がかなり減ったな、朝居まで捕まってしまうとはな...神成とかいう奴は頭が弱いが、戦力にはなった...かなりの痛手を負ったな...」

「.....兵はまだ募集したらいいわ...まだあなたがいるから大丈夫よ...」

「.....嬉しいね、だが次は今までと比べると未知の領域になる...一筋縄ではいかないぞ...相当覚悟がいる作業だ...！」

「...分かってるわ、慎重にしないとね...はあはあ...」

「...本当にそんな体で大丈夫なのか？もう満足に動くことは不可能だ...」

緋岡が城ノ内を気に掛けるが、彼女は目で大丈夫だと訴えた。緋岡は呆れて言葉を返せなかった。

「.....死ぬ前にやり遂げて見せるわ...のうのうと生きている奴らを苦しめて見せる...！朝居もそれを望んでいるはず...！」

「.....そうか、確かに今のままでは腑に落ちない...付き合っただけでやるよ、まだとっておきが残っているしな...」

「...ありがとう」

「.....それにしても何者なんだ...お前と対峙していた連中は？ただの警官隊とは思えない...テロ対策の特殊部隊か？」

緋岡は、眉間に皺を寄せて、城ノ内に質問を投げかけた。

「.....警察の...公安の人間のように...朝居もそいつらにやられた...！」

城ノ内は怒りをあらわにして、パソコンの画面にある人物の画像を表示した。

「.....彼女が...？」

「.....ええ、彼女が先陣を切り、私たちの野望をぶち壊した...！」

パソコンの画面に表示されたのは、裏で密偵として活動しているリカであった。城ノ内は、リカを心底憎んで復讐を考えていた。

「...ほう、こんな奴らが無能な警察組織に潜んでいたとはな...計算外だった...」

「...奴らは、私たちのことを調べつくしている...今度はこっちの番よ...情報は最大の武器になるからね...！」

「...分かった、うちのチームに優秀なハッカーが何人かいる...そいつらに頼んでみよう...」

「...早速立て直しましょう...次で終止符が打たれるわ...！」

「.....目が血走っているぞ...そう興奮するな...どちらにしろ、今年中には無理だ...新年改めて行動しようじゃないか...」

城ノ内たちが会話を交わしているうちに空は明るくなり、朝日が顔を出そうとしていた。こうして、二〇一四年は幕を閉じようとしていた。

二〇一五年 元旦

日本列島は大寒波に包まれていたが、無事に新年を迎えることが出来た。大劇場周辺には、黒紋付袴を身に纏った劇団員が続々と集結して、大勢のファンがカメラを構えながら入り待ちをしていた。大劇場では新年恒例の拝賀式が行われ、劇団員が嬉しそうに顔を合わせていた。各班を代表するトップスターが抱負を述べて新たなページが開かれようとしていた。

続いて新春鏡開きが執り行われ、チエが代表して登場した。去年は、チエ率いる班が正月公演を務め大いに盛り上がった。今年も元旦から公演が始まり、多くのファンが押し寄せて実に賑やかであった。

しかし、そんな中、大劇場にはリカの姿はなかった。

兵庫県のあるマンション密集地の一室、つい数日前まで住人が居たが、今は空室であった。朝になれば、住人が目を擦りながら起きてきて、まずベランダで布団を干したり、枕の埃を取ろう

とパンパンと叩いていた。次にポットのお湯を沸かし、沸くまで洗顔作業を行う。続いてブラックコーヒーをゆっくり飲む。そして、テレビをつけながら化粧を二十分くらいで済ます。住人はマイペースなため、なかなか仕事場に向かおうとしない、ほとんどぎりぎりで出発していた。生活感あるお洒落なインテリアもなくなり、静かな空間が漂っていた。ここに住んでいたのはリカであった。

彼女はもうここに戻ってくることはなく、兵庫県には居なかった。

新年二日目、あいわからず厳しい寒さが続き、吹雪いている地域が多々あった。しかし、首都東京はどうにか天気に恵まれた。

東京 有楽町 東京歌劇団劇場

東京の劇場では、二日から公演がスタートしていた。公演の内容はリカの退団公演であった。芝居では誰より平和を願い、美貌と逞しさを併せ持つ王を演じ、ショーでは煌びやかな鳳凰を演じる。彼女の独特なファンサービスは、健在で何度も観客席にお辞儀をしたり、ウインクをしたりと場を盛り上げた。リカは、東京の地でファンに向けて舞台挨拶を行った。

「え～風邪を引きそうになったらこの熱い歌劇団劇場に遊びに来て下さい～！」

若干シュールではあるが、ファンたちはリカの言葉に感銘を受けていた。

何はともわれ、リカと歌劇団の新たな一年が始まろうとしていた。リカは無事に千秋楽まで突っ走ろうと考えていたが、そうは行かず、過酷な試練が待ち受けていた。

鳳の眼 舞の章 水都篇 完

鳳の眼 舞の章 水都篇

<http://p.booklog.jp/book/99404>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99404>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99404>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ